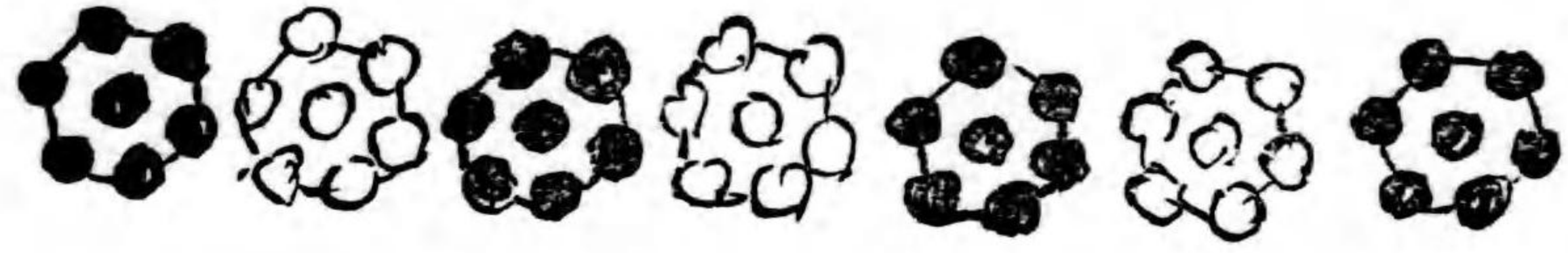


ながら、

「ほんまに涼すずしうなりましたえなあ。」など、つよ呟つぶやいて河原かはらを  
みつめるその眼めには月つきの色いろが白しろく、口紅くちべにをもれる皓齒しろはが石いし  
のやうに冷つめたい。

その日ひから木屋町きやまちには日ひ一日いちにちに秋あきが更まけまさつてゆく  
である。

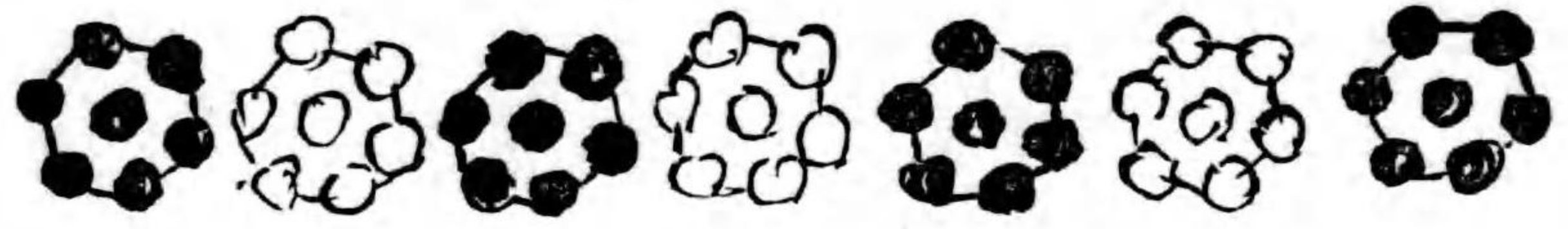




舞姫のため  
に筑紫の山持  
が七つの山を  
賣ると云ふ秋

挿話

紅燈の巷にありて聴くものがたりの數々、あはれなるもの、をかしきもの、先づ何よりか語りはじめむ。



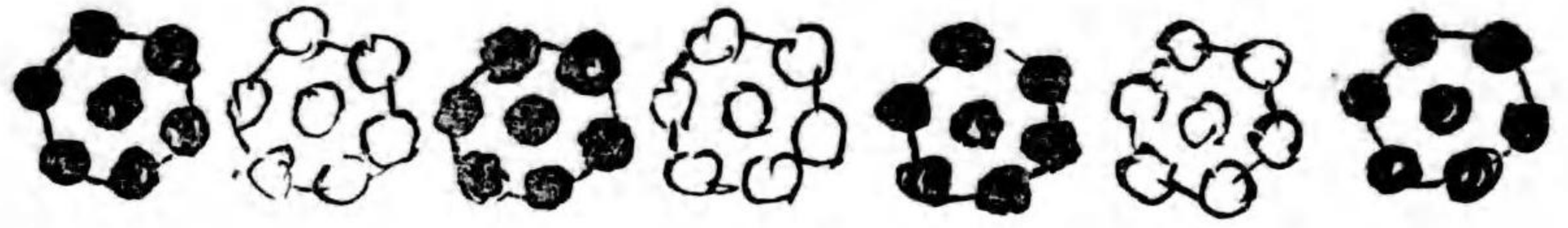
木屋町の夜の話をたねも盡き月落ち方となり  
にけるかな  
雨ほそく叡山苔を濡らしぬ君とながむ  
木屋町の庭



木屋町

君よ、木屋町の夜を忘れたまふな。

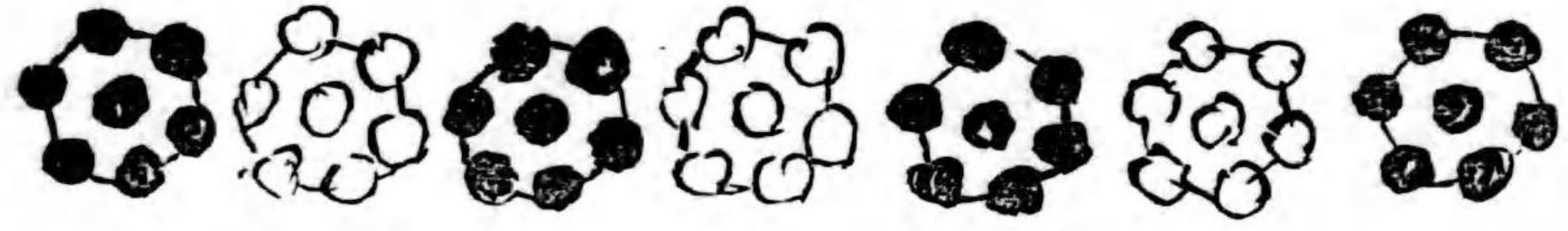




四條河原

河原蓬の香にこそにはへ、われらが戀のたかき噂は。

たそがれの四條河原の露のなか君によく  
似し泣く音聴こゆる  
露に濡れ君が素足もなまめきぬ河原蓬に  
夜戸出するとき

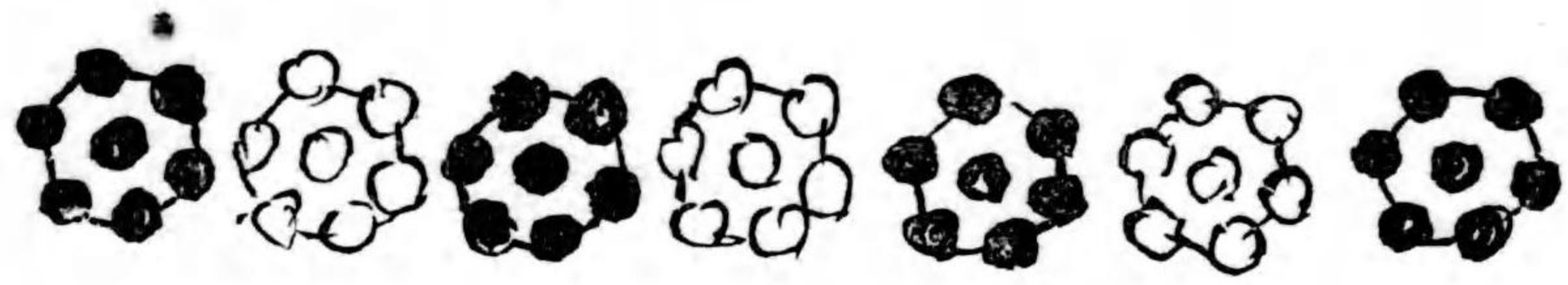


こほろぎ

君泣きぬ、こほろぎのこと。こほろぎ鳴きぬ、君のこと。

こほろぎの皺唄れどゑを聴きてふと高野  
の叔父を思ふ君かな  
こほろぎや君と歩めば木履の鈴も鳴くや  
と思はれしかな

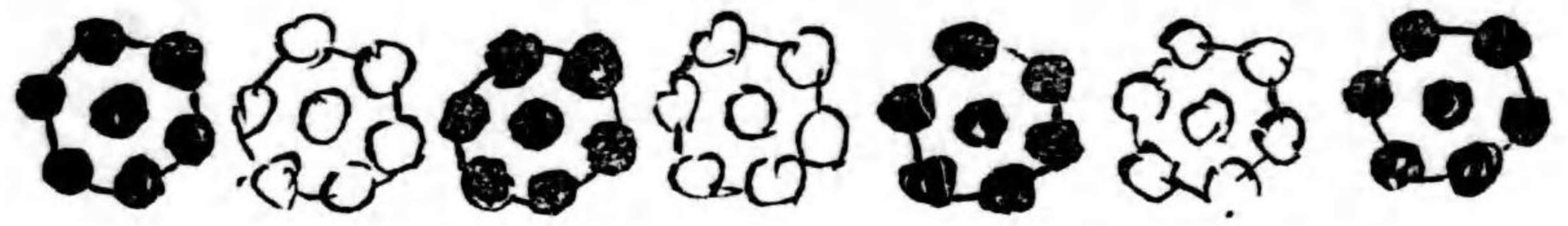




蟲の音

かかる不思議もあることゆゑ、ゆめ河原にな出でたまひそ。

蟲の音にふと誘はれし舞姫は河原にゆきてゆくゑ知らずも

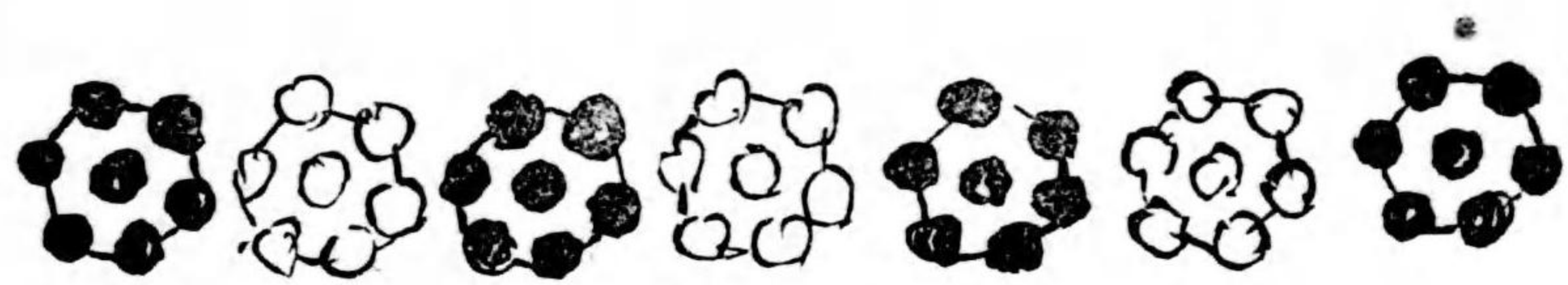


樊噲

樊噲と云へどむくつけき男にはあらず。いづれはたはれなが世を忍ぶ假の名と知らずや。

あだ名して樊噲と呼ぶ極道もしみじみとしてあるふ秋の夜



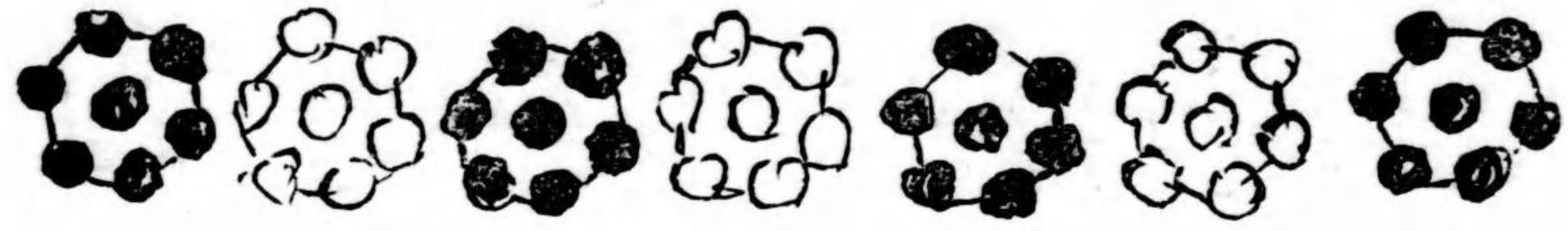


立 秋

床の數日ごとに減りて、風さへ寒くなりまさりぬ。  
ひと夏のみ戀ははかなし。

秋風が疎らになりし床を吹く頃ともなら  
ば君にわかれむ





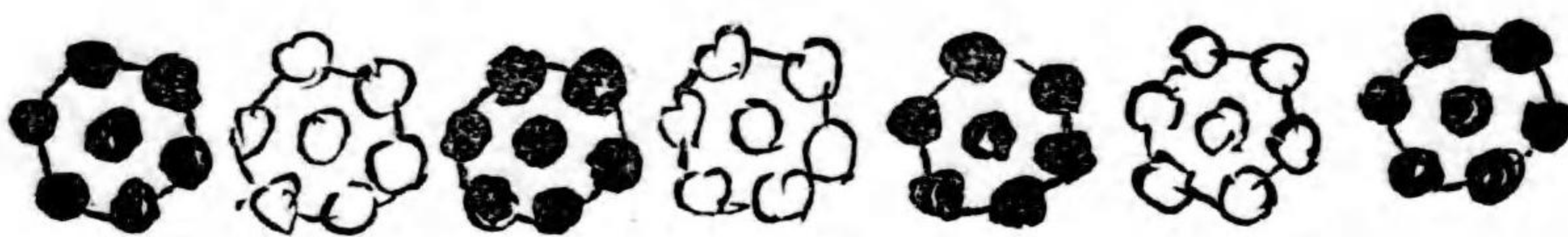
島原小景

この里の事は皆偽かと思へば、折ふしは眞實も降り  
けり。——西鶴。

秋の夜は廓もさびしかなしげに禿のこゑ  
す鼠尾草の花

高橋と太夫の名をばしるしたる大長持の  
瑠璃の棹かな

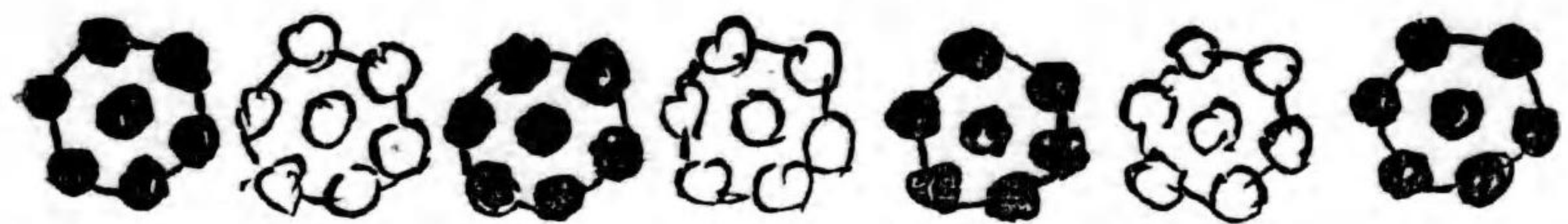




嗟  
峨

嗟峨にゆきしは何時なりけむ。胸に残るひともなけ  
れば、過ぎし日のことはなべて忘れつ。

しめやかに時雨の過ぐる音聴こゆ嗟峨は  
もさびし君とゆけども

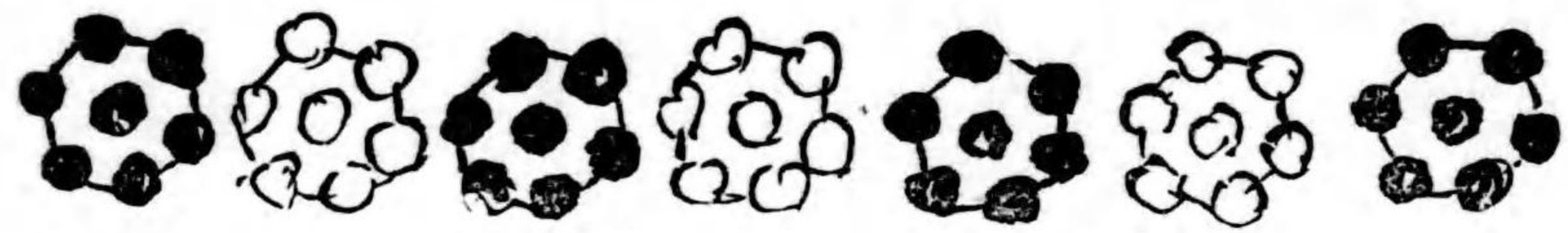


戀  
物語

戀物語もおほく聴きぬ。京にて聴けばことさらにあ  
はれさ身にしむこころぞする。

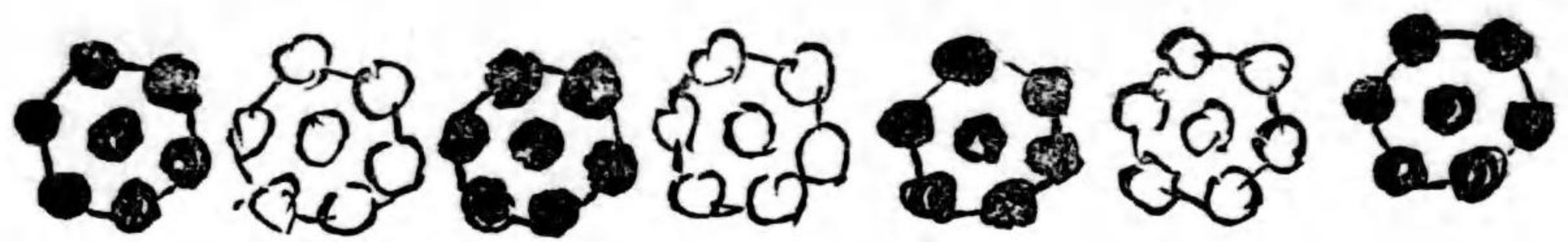
うつくしき僧とをさなき舞姫の戀がたり  
など悲しかりにし





くふつと言葉をきつて互に黒い瞳を見交はしながら不思議な沈黙に囚はれることもあつたが、そのうちにいつかしらほの暗い紙燭の光のさゆらぎや、ひつそりとした秋の夜更けの寂しい情趣に誘はれて、彼等の間の話題は自然と百物語のやうな奇怪な怪談に落ちて行つた。

一番年かさの小君は先づ序開きに稍滑稽な俳味をおびた狸の話をした。その次には、伏眼がちな美しい瞳をもつたさん子がひそひそと訴へるやうな低聲で艶殺にされた美姫の執念を語つた。いづれも夢幻的な色彩に富んだ幻怪な物語ではあつたが、彼等の玉蟲色に光る小さな唇を洩れる時、多くは玉のやうな滑らかな言葉の肌を掩はれて、核心の凄味といふものは少しも聞く人の耳に傳へられなかつ

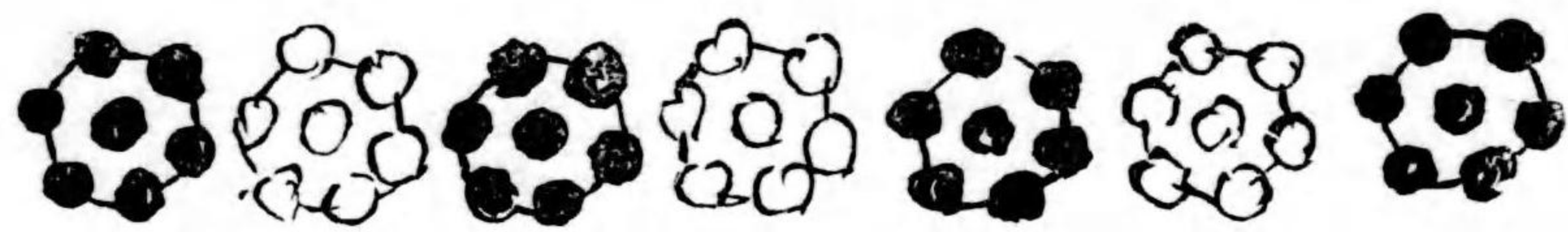


蜘蛛

その晩はどうした機からか、四人も集まつた舞妓達はいづれも夜の閑けまさるに従つて漸次と物語りの興味に酔はされて来た。問はず語りさまさまの面白可笑しい話が次から次へと絶え間もなく打續いた。まだ感情の激しい起伏をみせぬあどけない戀語りをする者もあれば、自分達の果敢ない、そして何處か哀愁に充ちた生立ちを語るものもあつた。しまひにはさすがに話の種も盡きて、誰からともな





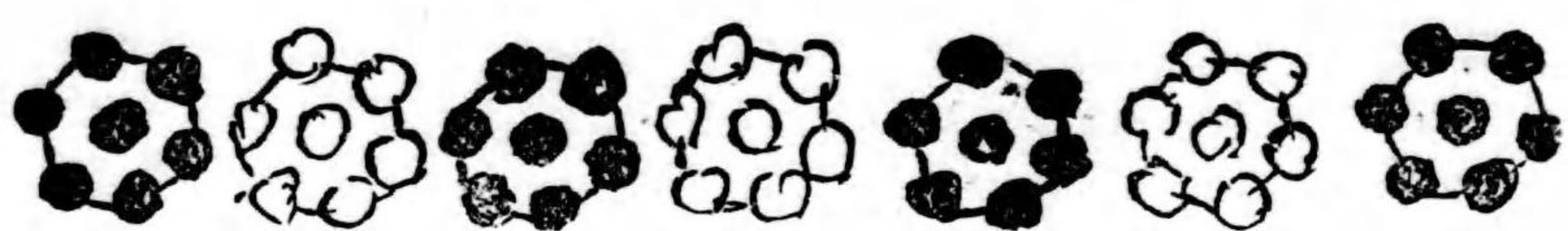


た。彼等自身にとつてはその小さな情緒や、空想を戦かすやうな物凄事實であつても、遙かに東から来た親しみの浅い旅人にはそれが全く一個の音楽であつて、それから單音階の笛聲が與へるやうな微妙な音調の美を聴取し得るに過ぎない場合が多かつた。

さん子の物語りが濟むと、今度は頬の豊よかな松勇が急に思ひついたやうに大きな瞳を輝かして、

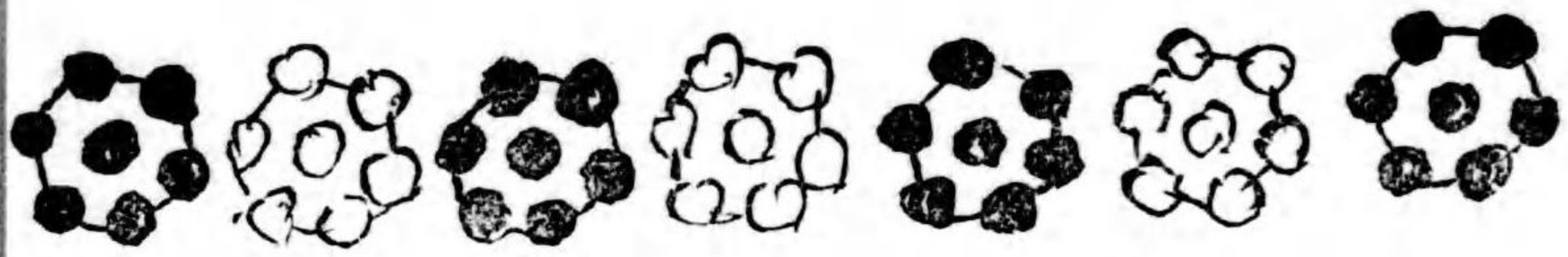
「ほんなら今度は私に云はしとくれやはいな。」と、叫んで隣に坐つた小菊の美しい友禪の袖につつと手を置いた。そして話の筋を纏めようとするのか、その儘天井の方へ眼を漂はせながらじつと深い思ひに暮れるやうな姿をした。

白川にかけ出した縁端には宵から初秋の良夜を思はせる



やうな冴え渡つた月光が射し入つてゐたが、それもいつの間にか影を收めて、薄白い障子の面は一面に何處となく濕氣を含んで来た。ふと氣づいて耳を敬てると、又今宵も時雨が落として来たとみえて、檜皮葺きの低い軒先にはひそやかな雨滴の音がしとしと滅入るやうに聞えてゐる。そして狭い川をなかに夾んだ軒並の家々もいつになく絃歌のさんざめきをひそめて、暗く更け静まつた夜の底からは咽ぶやうな、嘆きわづらふやうな水音ばかりが絶え間もなく湧き上つて来る。山に近い街の氣紛れた天候はそれととも鋭い冷氣を運んで来て火鉢の側へ寄り添ひたいやうな寒さが間内に漸次と忍び入つて来たが、それでも一座の興趣は静寂ととも凝つて、舞妓達は片唾をのんで今にも語り





出さうとする松勇の顔に睡を据ゑてゐた。

暫らくすると松勇は漸う我に返つて、

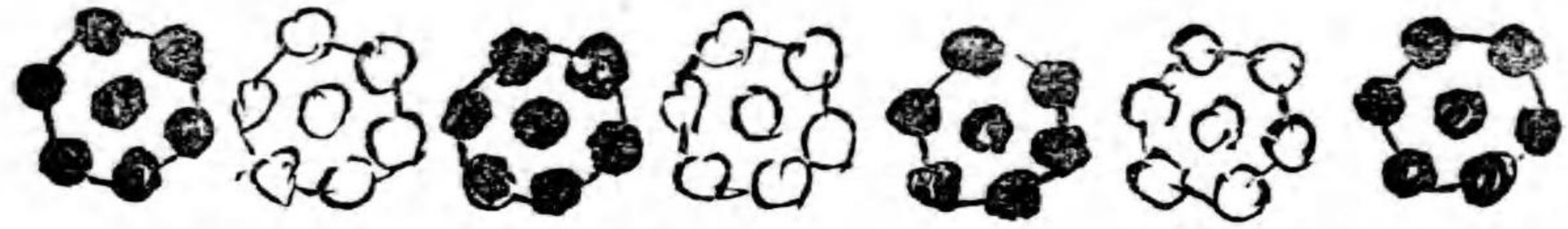
「何やしらん筋が怪體になつてしまふけれど、私のはな、蜘蛛の精の話どつせ。」と、云ひながら静かな、考へ深い眼眸をして一座を見渡した。

「蜘蛛の精ちふのは何の事です？」と、一番年の下な小菊は圓らかな眼を睜つて、頓狂な聲で聞く。

「まあ、黙つて聞いといでやはい。」と、さん子は眉を顰めてたしなめるやうにその言葉を抑へて、松勇の方をみながら、「早う云うてお呉れやすな。そないに考へんでもえゝやないか。」

「ぢや云ひますわ。この話はな、こないだお客さんにせん

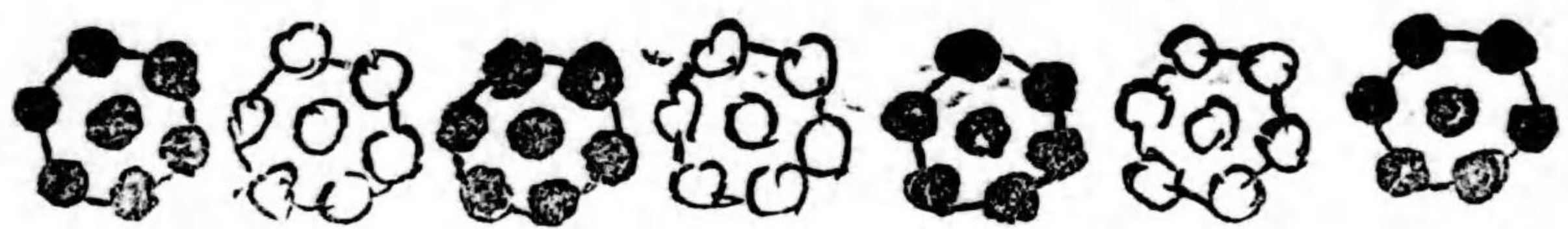




ど云ふて貰うたんやけど、鈍なさかいによう覚えてやへんの。ほんでに私にはよう云へんかも知れんけど、ほんまはな、そら恐い恐い話やのつせ。」と、松勇は一膝のり出して蜘蛛の精の昔話を諄々と語りはじめた。

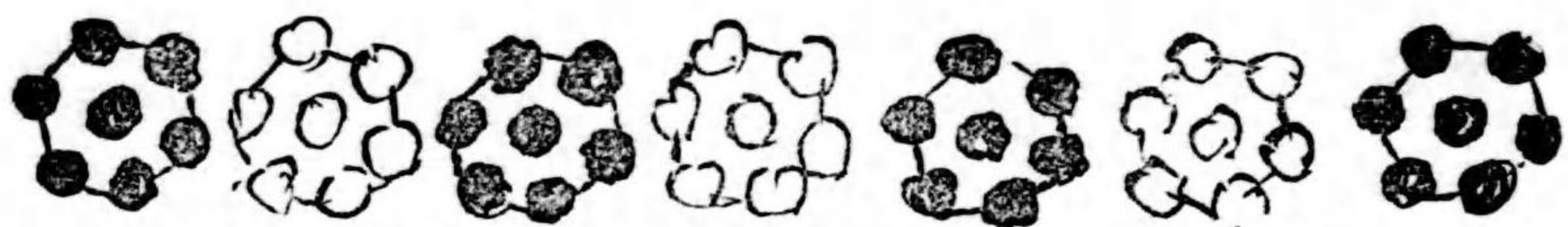
「昔な、丹波の國の在所に或るお庄屋はんがあつたんどすて。そこはな、もう昔からの古い古い家だな、お金やたら寶ものやたらそんなものがたんとあるのどすて。そこに一人の娘はんがあつた。年は丁度十六でな、そらほんまに美しい美しい娘はんやの。そんなえゝ家で安條にして育てゝ貰はゝつたんやさかいな、ものもよう出来るし賢うてな、惡いとこは爪の先ほどもあらへんの。ほんでにな、方々の金満家やら、お侍はんやらからな是非嫁にせう嫁にせうちう





てきつう喧しう云ふて來やはんの。そやけどな娘はんの方には誰れが好きや嫌ひやちうことはないのやけど、お父さんや、お母あんがえゝもん好きでな、どれも氣に入らんちうて中々お婿はんを取つて呉れやはらへんの。とな、その次の村にな矢張り同じやうなお庄屋はんがおしてな、その息子はんがまた業平やつたかいな——そや、そや、業平はんのやうな美しい美しい男はんやの。學問もよう出来るし溫和しうてな、そらほんまにえゝ息子はんやの。ほんでな、その男はんやつたらえゝやろちうてな到頭お父さんもお母あんも承知しやはつてな、吉日たら云ふ日を選んで愈々お婿はんにとらはんの。」

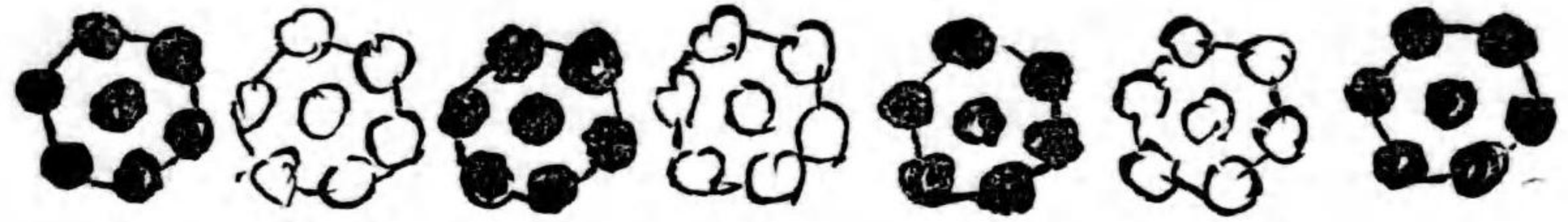
「ふん、えゝことな。そんな美しい男はんやつたら、娘は



んもさぞ嬉しうおしたらうえなあ。小君は身につまされたやうに肩を揺りあげながら云つて、さん子の顔を見る。さん子は黙つて合點くばかりであつた。

「ほんでな、その日はもう朝からえらい騒ぎでな、仕度もちんとしまうて待つてやはるとな、夕方になつていよいよそのお婿はんが仰山なお供を連れてお駕に乗つて來やはつた。ほして奥の大座敷で親類の人やら、お客はんやらみんな一緒によばれてお振舞ひが始まん。ほしてな、夜遅う遅うにお開きになつてな、怪體なことを云ふやうにおすけど、娘はんはお婿はんと一緒にお床へ入らはんの。」と松勇は眞顔で云ひさして、急に喉を撫でながら咳入つて、「はあ喉が痛うて叶はんわ、姐はん、えらい濟まんこといつけど



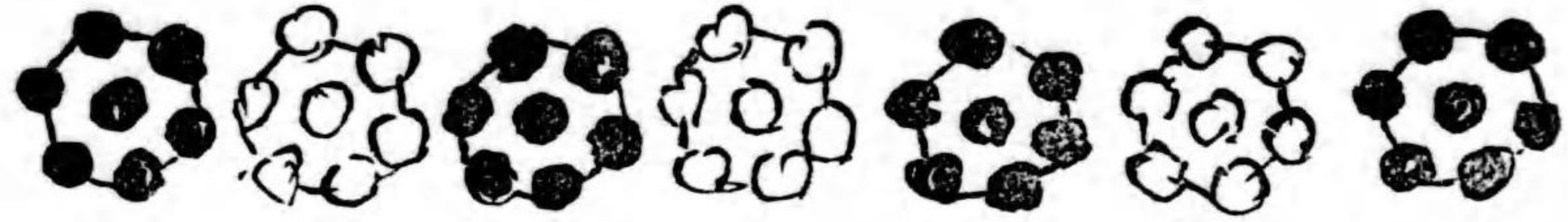


茶を一杯よんどくれやはいな。」

頼まれた小君は話の筋に追はれてゆくやうな熱つこい眼  
眸をしながら手近にあつた久須を取上げて小さな湯呑へ濃  
い番茶を注いで出す。

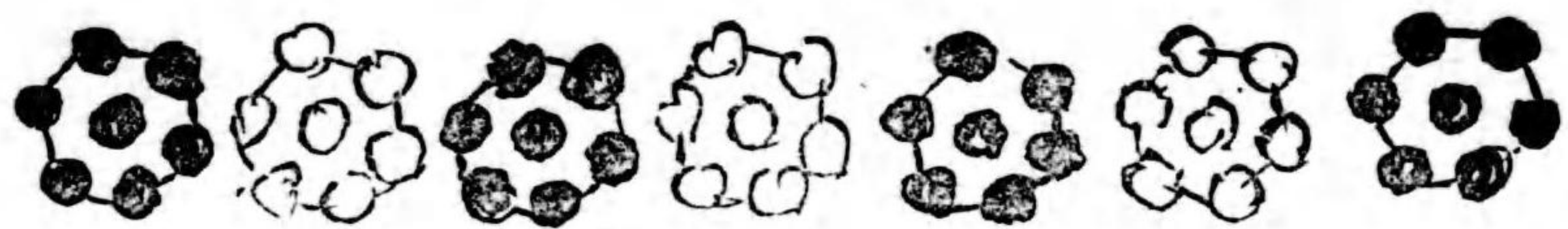
「おほきに。」と、松勇は眼を落としてそれをぐつと一息に  
飲みほしながら「はあ、おいし。これからが恐いのどつせ。」  
と、湯呑を傍へ置くと又一膝乗り出して語り續けた。

「ほんでな、そのうちに漸次と夜も更けて来て眞夜中にな  
んの。とな、誰や知らんそのお庄屋はんの家をきつう  
叩かはる人があんの。ほんでに家の人もびつくりして起き  
てみやはると、それはお婿はんの里のお庄屋はんから来た  
使やの。息をせいせい切らしてな、實は今夜お婿はんにな



らはる息子はんが此方へ来うと思つて途中までおいでやし  
たんやけど、俄の大病で今お亡りになりましたから、一寸  
急いでお断りに来ました。ちやはんの。まあ怪體な今頃何  
云ふてなはんのやろ、狐にでも化かされはつたんやないか  
と思ふてな、家の人達は笑ひながら、「お婿はんはもう夕方  
にちやんとおいでやして、御祝言も目出度う濟んで今奥の  
間に寝とゐやすがな。」ちうとな、その使に來た人は、吃驚  
してな、「そんな譯はあらへん。」ちうて、どうしても聞かは  
らへんの。餘りきつう云はるもんやさかいな、家の人もし  
まいには怪體になつてな、ほんならちうて娘はん達の寢  
てやはる間へいて、戸の外から娘はんの名を呼んでみやは  
んの。とな、どうした譯や知らん、なかうらはちよいとも





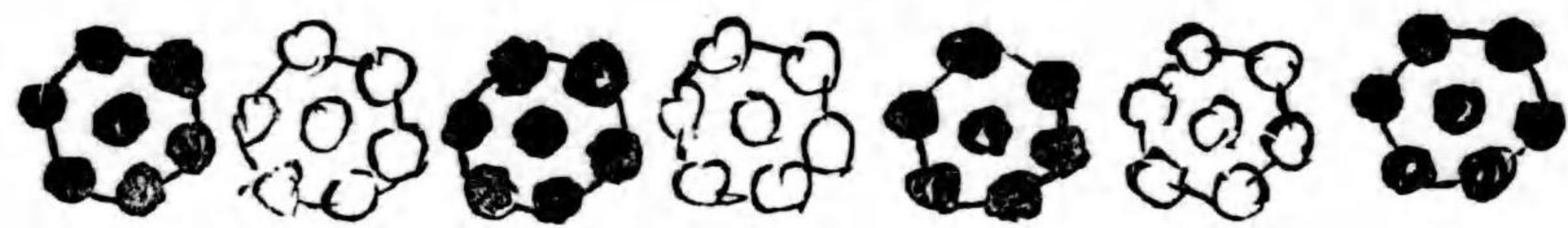
返事がせん。ほんでにな、お母あんながそうつと戸をあけてみやはると、はッちうて吃驚して突如後へ轉けやはつた……。」

「ふん、まあどうしたんえ？」一座の舞妓は急にぞつとしたやうに袂を胸に抱しめて五體を固く竦めた。語つてゐる松勇もみるみるさつと顔色を變へて、

「私もう恐うて云へんわ。」

「お云ひやはいな。そこまで云ふてやめたら却つて恐いわ。」と、さん子は深い穴の底を差し覗くやうな顔をしながらおどおどした聲で云つた。

「ほんなら云ひますわ。」と、松勇はどくりと軽く喉を鳴らしながら暫らく言葉を切つて、戸を開けてみるとな、もう



なかはえらい蜘蛛の巢でな、そんなかに大きな蜘蛛がこな

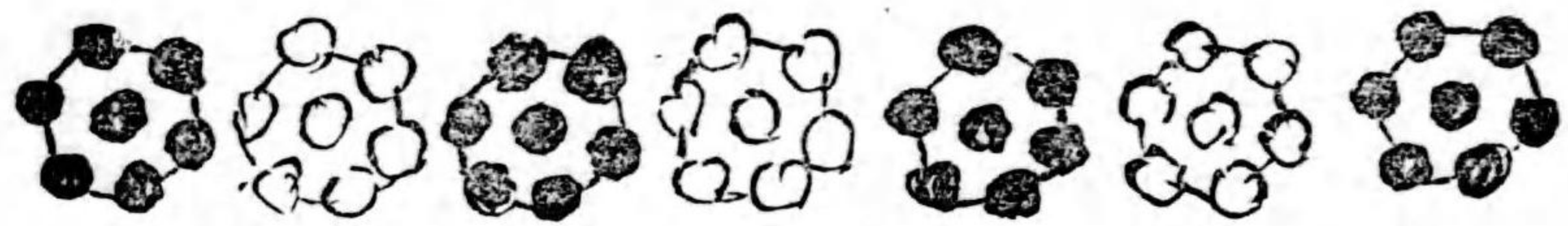
いにつくばうてな、娘はんの生血を吸うてるのだすて、青い青い眼を光らしてな……。」

「へえ！蜘蛛？。厭らしやの！」三人の舞妓は冷水でも浴びせかけられたやうにぶるぶる慄へながら、誰からともなくじりじりと火鉢の側へにじり寄つて來た。なかでも小菊は唇の色まで變へながら「ほんでその娘はんはどうしやはつたんえ？」

「その娘はんはな、そんなり死なはつたんやて。」

「まあ、まあ、どないにせう。ほんまに蜘蛛の精が憑いたんやなあ。」と、小君は息づまつたやうな聲で呟いて眉を顰める。



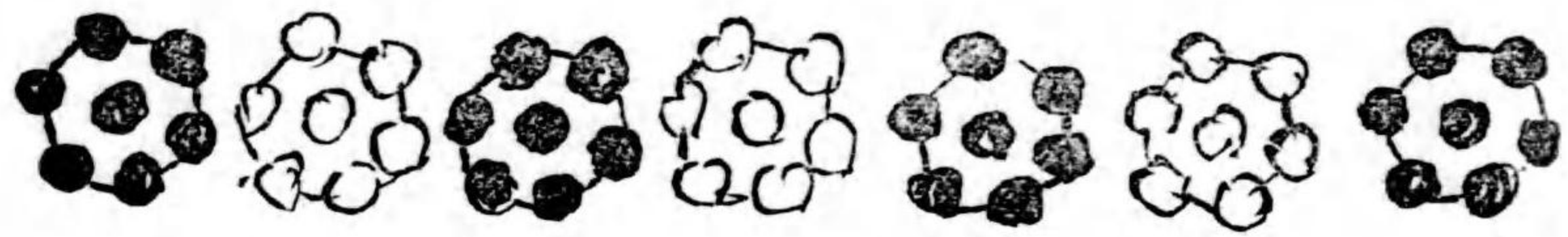


「ふん。さうやて。その近くの山に住んでゐた主がその恐  
い蜘蛛やつたんどすて。娘はんが餘り美しいもんやさかい  
にふつと見染めはつてな、業をしやはつたんどすて。ほん  
まに恐いやないか。」

四人の舞妓はいつの間にか花のやうに重なつて、艶やか  
な金糸の繡のある長帯を曳きながら己が美しい姿を蜘蛛に  
咀はれるのを恐れるやうな姿をしてゐる。私はつい揶揄つ  
てやる氣になつて、

「恐い話ぢやないか。あんたはん達のやうに美しいとほん  
とにその話のやうに蜘蛛が憑くよ。」

「まあ、よう云へる。そんなん厭やわ。」とさん子は袂で顔  
を隠しながら甘えるやうに云ふ。小君は強て笑ひながらそ



の後を引取つて、

「さうどすえなあ、あんたのやうに美しいとほんまに蜘蛛  
が憑くえ。」

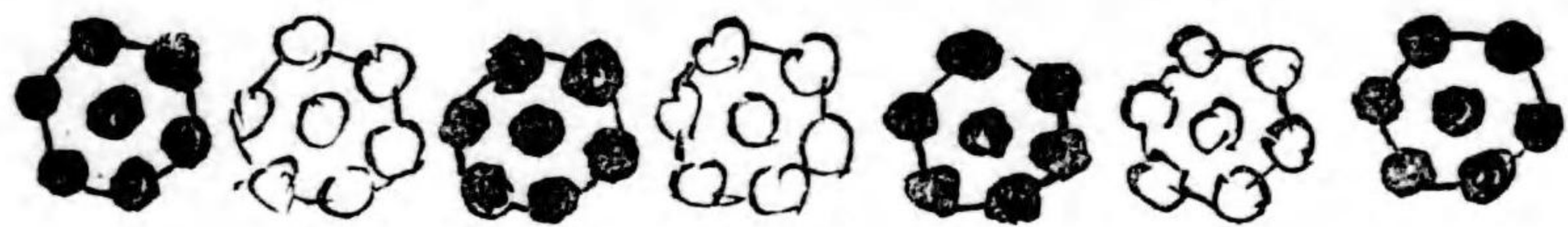
「阿呆らしい。きつう云はえるなあ。」と、さん子が恨み顔  
に云ふ途端に一番端に坐つてゐた小菊が俄に

「きやツ！」と叫んで突如さん子の膝へばたりと顔を伏せ  
た。私も思はずはつとして聲を立てると、小菊は泣き聲に  
なつて吃りながら、

「蜘蛛。蜘蛛……。」

と、みるとすぐ傍の紙燭の陰に、天井の簀子から陽炎の  
やうな一縷の糸を曳いて一疋の小さな蜘蛛が下つてゐる。  
そしてほの暗い蠟燭の焰のゆらぐなかで、一つの糸を巧に





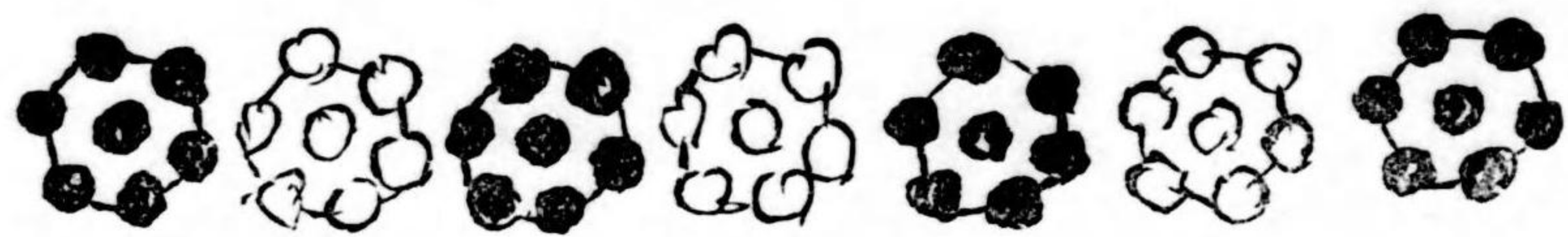
操りながら丁度今の物語りの神秘が凝つて姿をなしたやうに動きもせず軽ろやかに浮いてゐる。私はふと謎語を瞞めてゐるやうな心地に打たれて思はず、

「ほ、蜘蛛だ。蜘蛛だ。」と、我にもあらず呟いた。

漸うその姿を見付けた三人の舞妓は俄に又顔色を變へて聲もたてず、たゞ物に憑かれたやうにまじまじと小さい蟲の姿を眺めた。その刹那、暗褐色の古びた壁と、夢のやうな紙燭の光とを背景にした彼等の姿態は全く凄艶な美しさの極限を示してゐた。圓らな眼にも、ひき緊まつた頬にも、唇にも、また強く拘攣した指の尖端にも脅威された神経の繊維があらはに露出して、而も名匠の手になつた彫像のやうな冷厳な沈靜がひそやかに流れてゐた。——あゝ、京

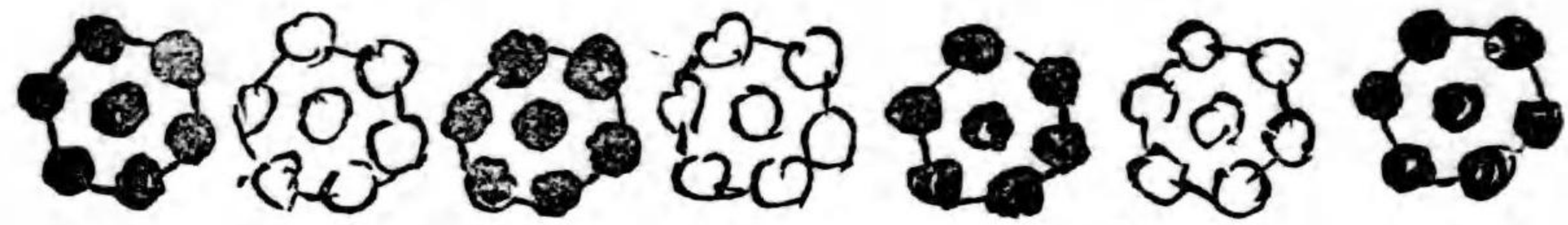






の舞妓まひこをして永とこしへに小ちいさき蜘蛛くもを恐おそれしめよ。而しかして醜みにくき  
その妄執まうしうをして彼等かれらの美うつくしさを咀のろはしむること勿なれ！

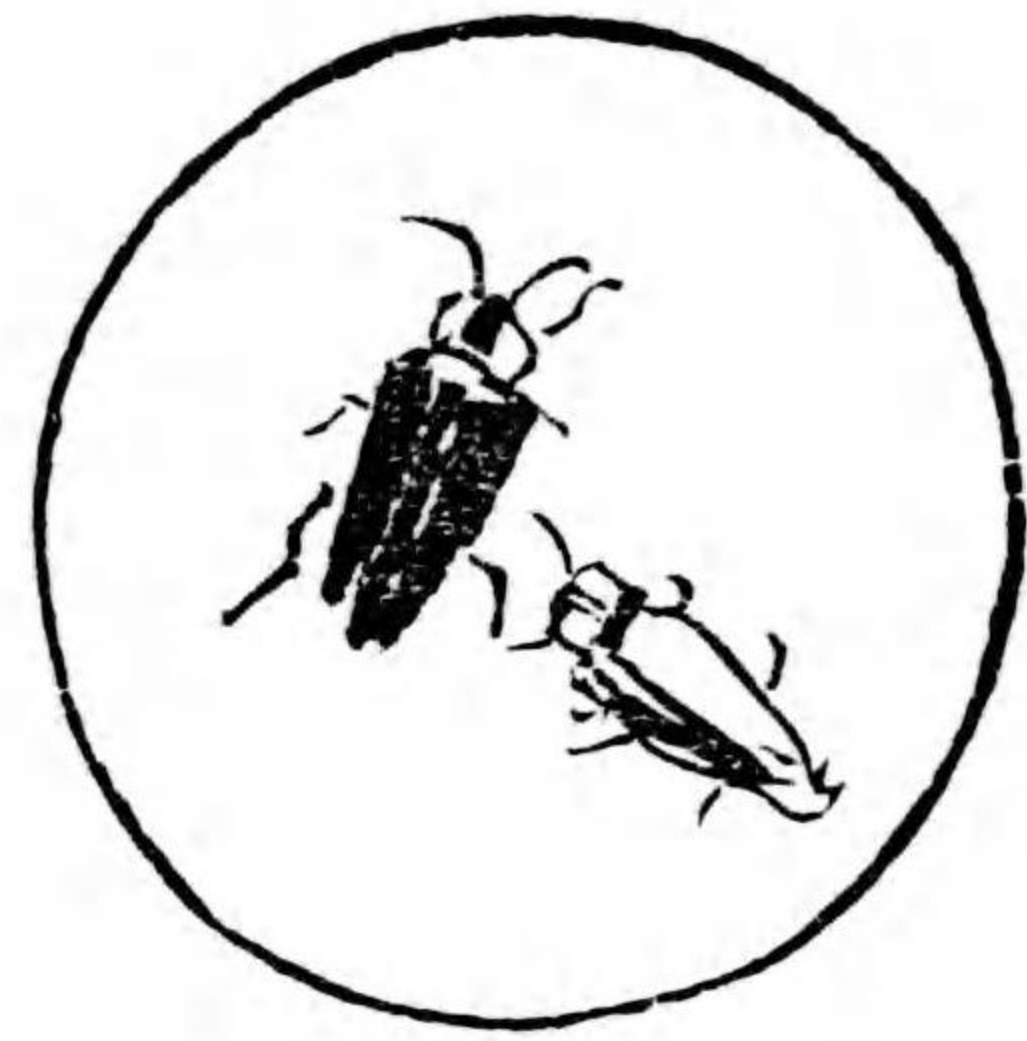
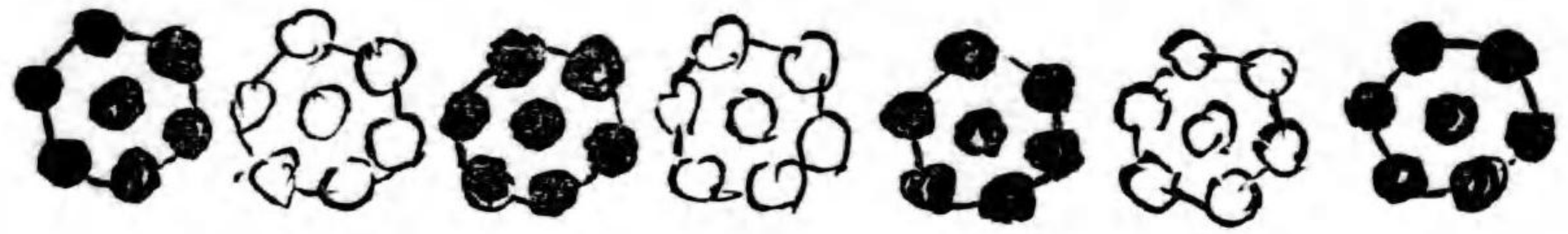




怪談も君と聴くときなまめきぬ怖やと云  
 ひて手取りたまへば  
 幽霊のすがた見ゆれと舞姫をおどしなふ  
 るも春の夜のこと

怪談

縁子の怪談を好むこと。はやくも語りはじむるや。



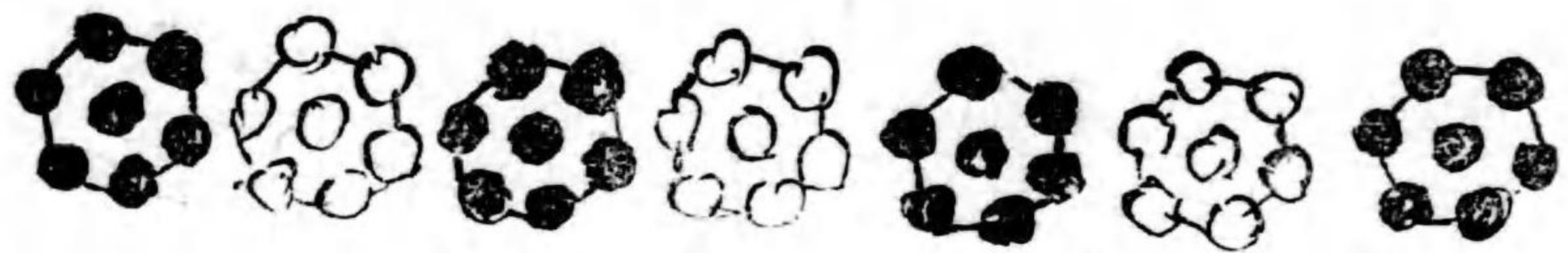
未

練

未練ほど嬉しきものはなく、  
 また未練ほど悲しきものもな  
 し。未練なりやこそ戀もすれ。

いささかは京に未練の残れるも戀しき人  
 のあればなるらむ

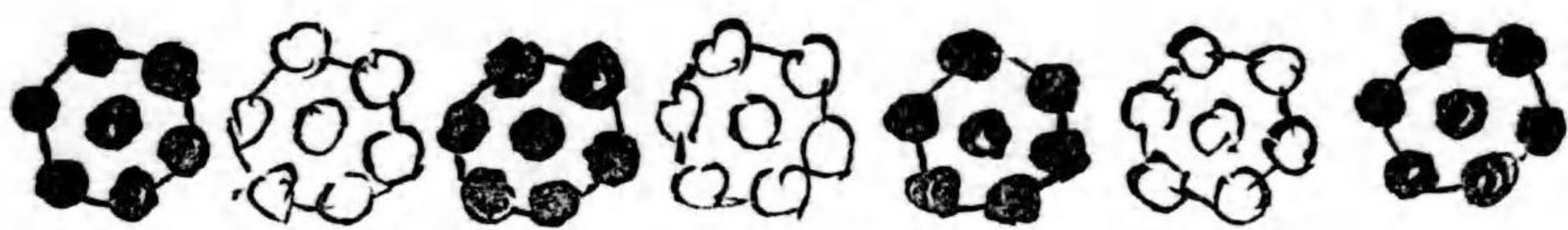




世之助が大原の里の雑魚寝よりわれの雑魚寝はなまめかしけれ  
 七人の舞姫とする雑魚寝よりまさる奢り  
 はあらじとぞ思ふ

雑魚寝

あけがたの寝亂れ姿なまめかしく、呼べどいらへもせぬひとよ。

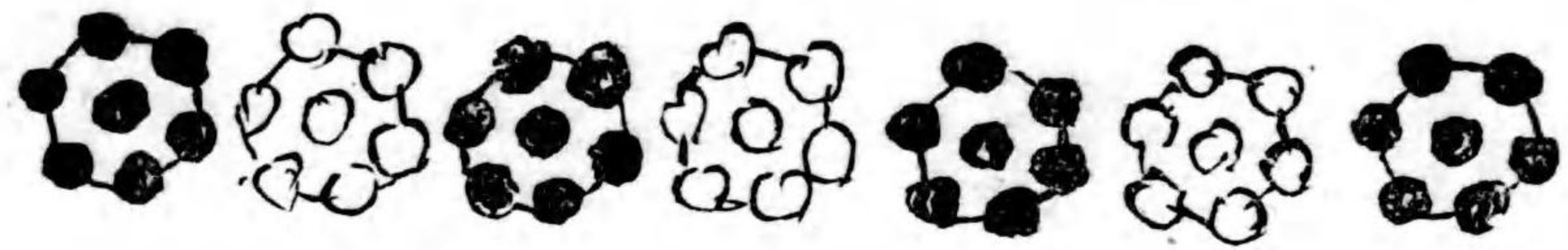


好色の客がこのみの鯨汁京にいさなはふ  
 さはぬものを

客

檀那客ほど憎きはなし。船持の俄分限、牽頭末社の總纏頭に、小判なきこそうらみなるらめ。

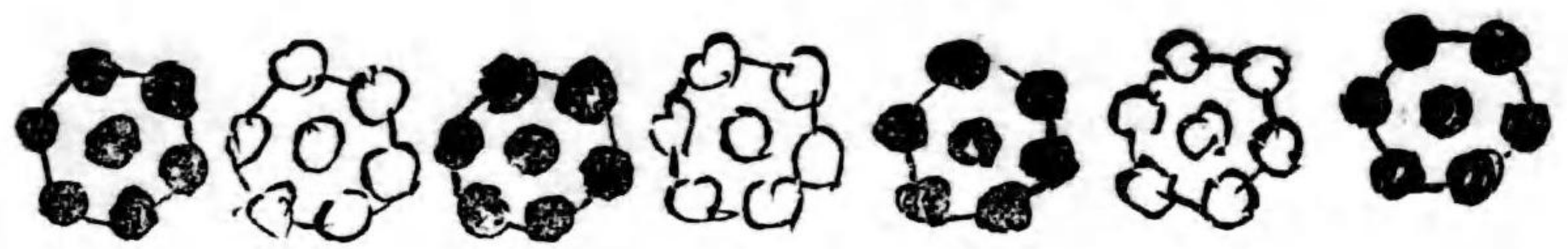




河見れば君によく似し女なんなゐてひねもす布ぬい  
 を晒らし暮らすも  
 君が家の苧おち姆まなるらむ見馴れたる繪ゑ日ひ傘がさ  
 いそぐ橋の上かな

途上所見

京なればそぞうあるきも面白く、急げば暮るる夕ゆふかな。

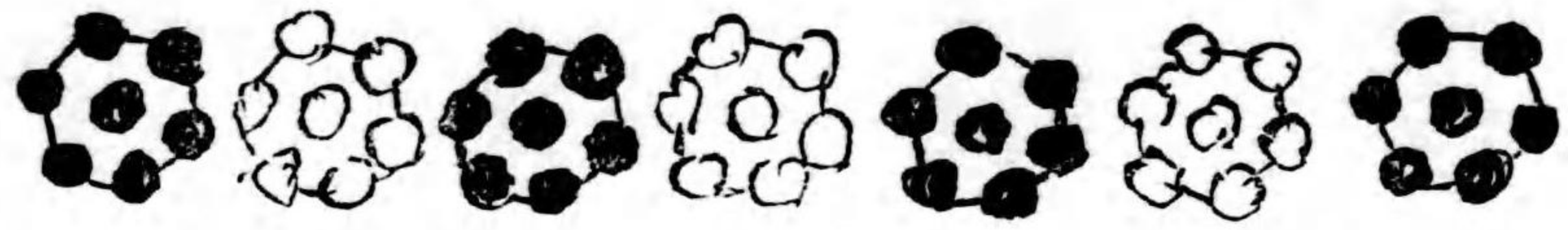


旅愁

旅びとの身ほど悲しきけなし。舞姫たちもわが戀を知られば語るよしもなく。

ただひとりはかなきことを思ひつつ祇園ぎん  
 街ゆく旅ごころかな

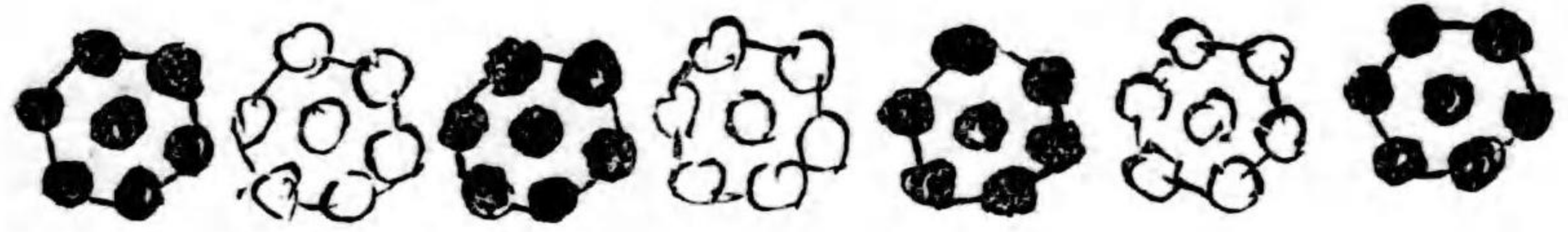




京中の目をおどろかす精巧に君が織らせ  
し舞ごろもかな

舞ごろも

金糸銀糸の繻もまげゆし。袂をひるがへして傍に眠る。うたたれの子の夢な覺ましそ。

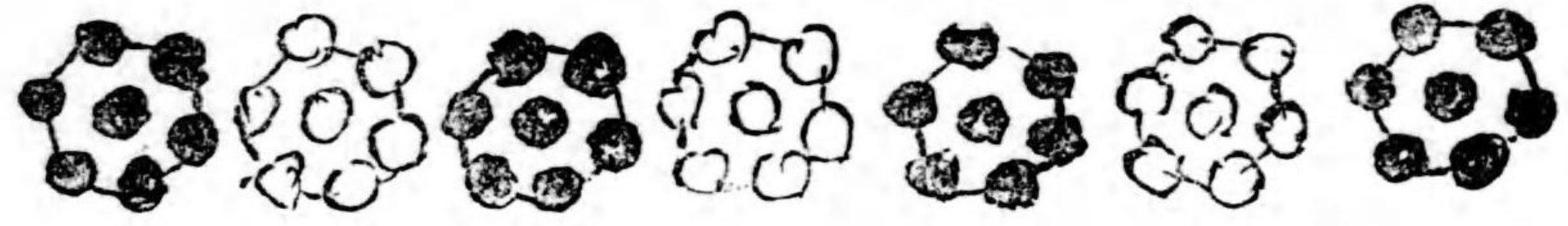


瓢亭

雑魚麻より覺めて朝はやく、舞姫つれて瓢亭の門を  
入れば、水の音さへも涼しきこちす。これもまた  
忘れえぬ思ひ出のひとつ。

錢形の石をあふれて舞姫の足をあらひぬ  
瓢亭の水



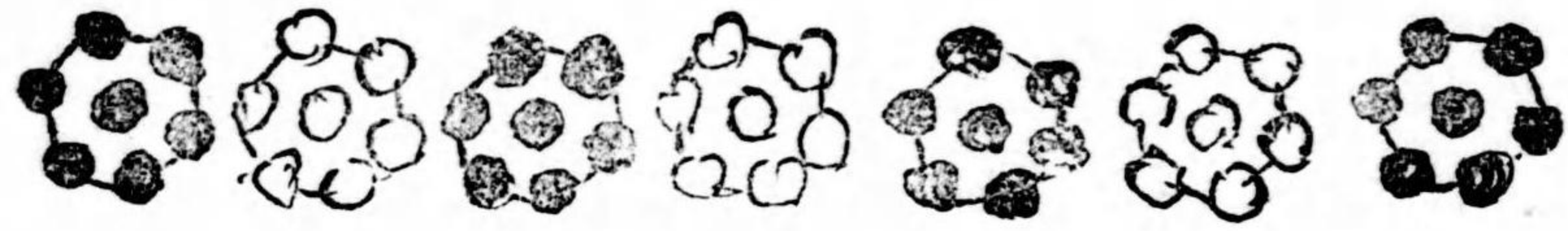


鐘樓守

年老ひし鐘樓守はこの年まで戀を知らずして暮らしぬ。あはれこの戀怖ろしや、謎のやうなる戀なれば。

舞姫にこがれて瘦せし黒谷の鐘樓守が  
ける鐘かな



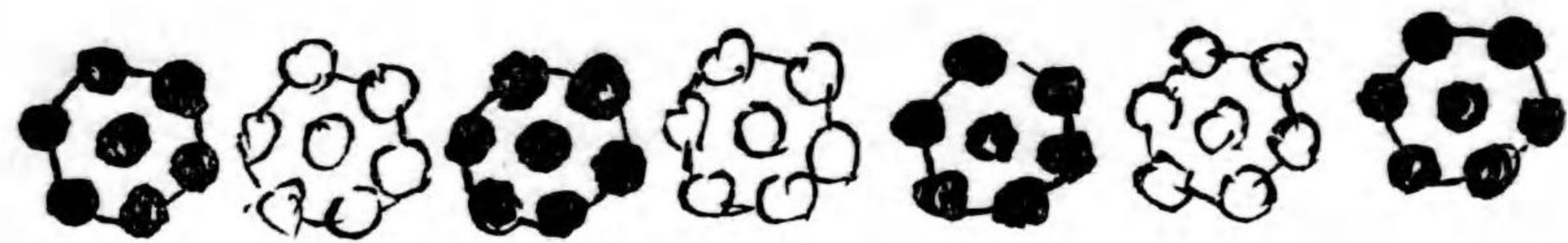


左阿彌より京を見下ろし酒汲みぬ祇園を  
 おのが庭と思ひて

左阿彌

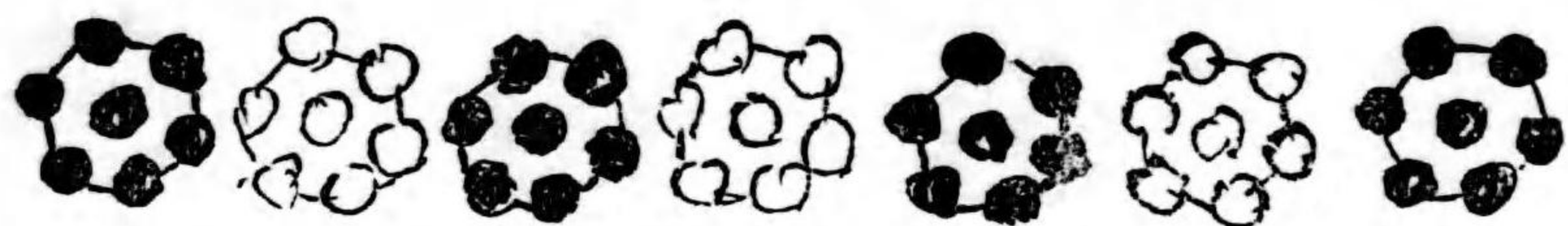
そのときは酒に忘れぬたれど、酔が覺むれば口惜し  
 や。君を恨みのこころなど、いつそ忘れて酔ひてあら  
 ばや。





# 雛 勇

松岡さんが愈々歐羅巴へ旅立たうといふ二三日前の晩であつた。幼馴染の村上さんと京へ来て初めて昵懇になつた私とは永の別れを惜しむためには上の木屋町の春月といふ席貸で心ばかりの小宴を張つた。その晩は遠い旅路に出てゆく人と、それを送る人とのしんみりした心持ちを残りなく汲みあふために態と若い藝妓達の賑やかな座もちを避けて、松岡さんが永年の間最負にしてゐた春之助と云ふ老妓と、それに同じ年頃の茶屋の女將をその席へ招んだだけであつた。そして西石垣の千茂登からひねつた食へものを仕

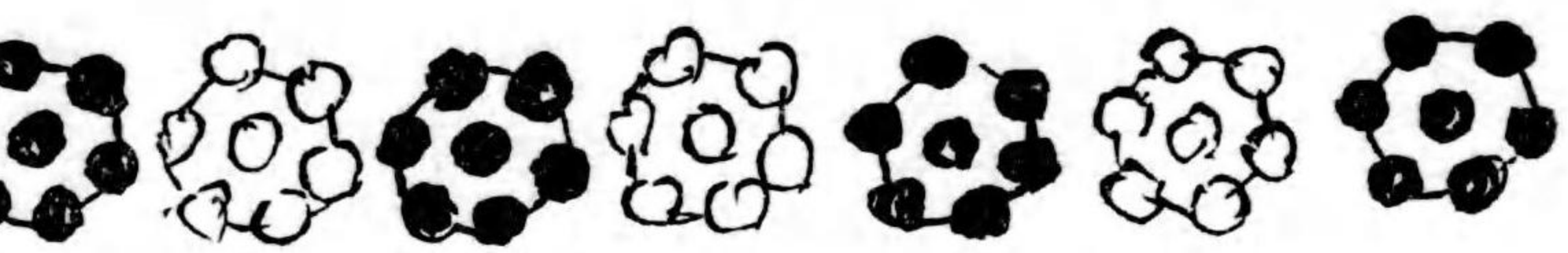


出させてそれを肴に苦茗を啜るやうな改まつた氣持ちで盃を汲みかはした。酒の弱い松岡さんは色白の美しい頬をほんのり染めながらいつになく口健めに語つた。伯林、倫敦、巴里、と見も知らぬ遠い國々の都の話から、話題は幾度か懐かしい京の街の思ひ出に歸つて、しまひには涙の滲むやうな哀深い言葉が一座の人々の唇に溢れて來た。そして更けまさる夜ともに興趣は益々凝つて東山のなだらかな頂に研ぎだしたやうな冷たい片破れ月が浮び出る頃にはいつの間にか誰も彼も皆浮世を忘れたやうな頼りない氣持になつてゐた。「なあ、松岡さん。雛勇が伊勢へ賣られて行つた晩もこんな晩やつたなあ。」話の途絶れた時村上さんはふとものに打

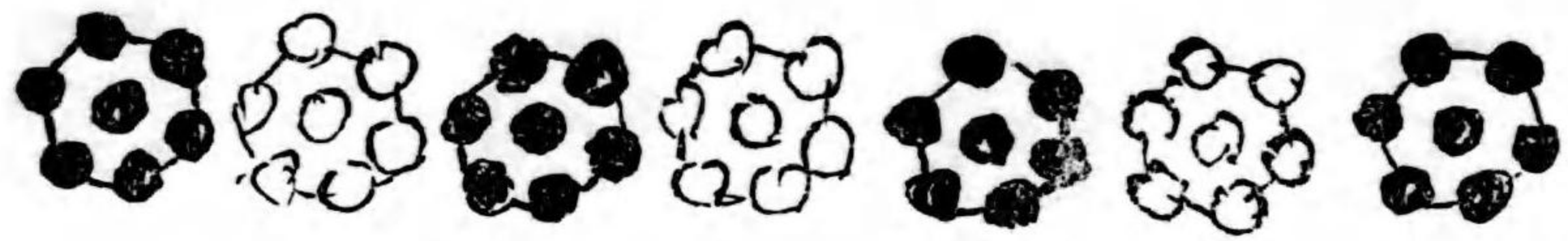




雛 勇



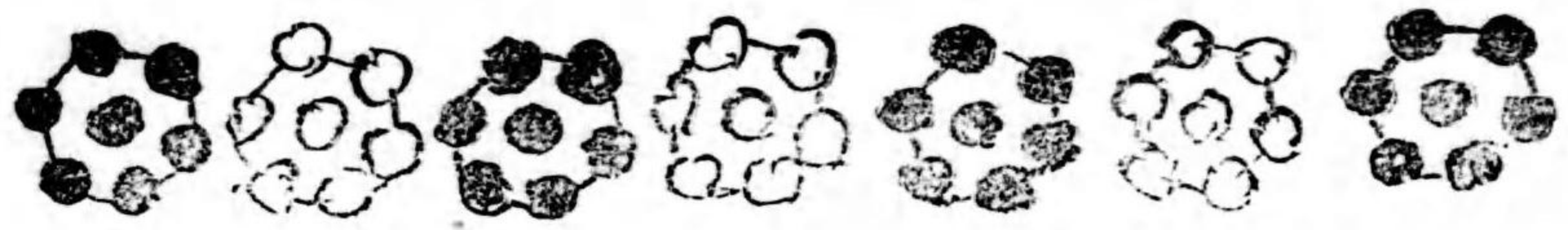
松岡さんが愈々歐羅巴へ旅立たうといふ二三日前の晩であつた。幼馴染の村上さんと京へ来て初めて昵懇になつた私とは永の別れを惜しむためには上の木屋町の春月といふ席貸で心ばかりの小宴を張つた。その晩は遠い旅路に出てゆく人と、それを送る人とのしんみりした心持ちを残りなく汲みあふために態と若い藝妓達の賑やかな座もちを避けて、松岡さんが永年の間最負にしてゐた春之助と云ふ老妓と、それに同じ年頃の茶屋の女將をその席へ招んだだけであつた。そして西石垣の千茂登からひねつた食へものを仕



出させてそれを肴に苦茗を啜るやうな改まつた氣持ちで盃を汲みかはした。

酒の弱い松岡さんは色白の美しい頬をほんのり染めながらいつになく口健めに語つた。伯林、倫敦、巴里、と見も知らぬ遠い國々の都の話から、話題は幾度か懐かしい京の街の思ひ出に歸つて、しまひには涙の滲むやうな哀深い言葉が一座の人々の唇に溢れて來た。そして更けまさる夜ともにもに興趣は益々凝つて東山のなだらかな頂に研ぎだしたやうな冷たい片破れ月が浮び出る頃にはいつの間にか誰も彼も皆浮世を忘れたやうな頼りない氣持になつてゐた。  
「なあ、松岡さん。雛勇が伊勢へ賣られて行つた晩もこんな晩やつたなあ。」話の途絶れた時村上さんはふとものに打





たれたやうにつかぬことを云ひ出した。

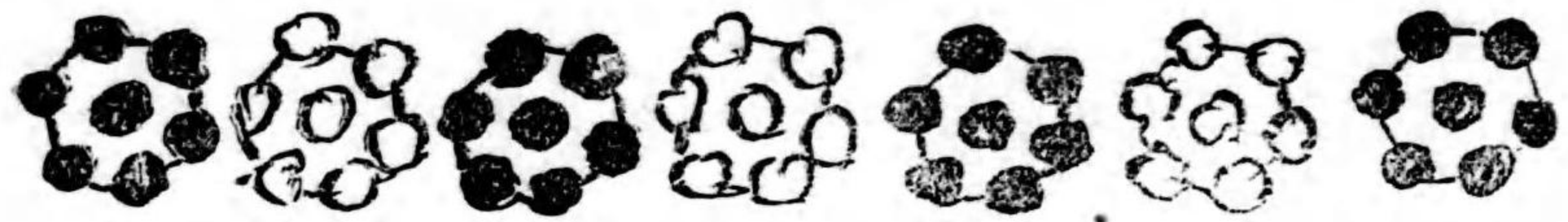
「おゝ、そや、そや。矢張月のある寒い寒い晩やつたなあもう長いことになるなあ。」と、松岡さんは遠い昔の幻を凝視するやうな惨ましい眼眸をしながら云つた。

それを聞いた春之助と女將はこれも急に昔を思ひ出すやうな心持ちを顔色に現はしながらじつと松岡さんの顔を見つめてゐたが、やがて女將は先づ口をきつて、

「ほんまにもうひと昔になりますえなあ。あの頃は松岡はんもまだお若うおしたわ。」

「さうとも、まだ二十二やつたからなあ。」

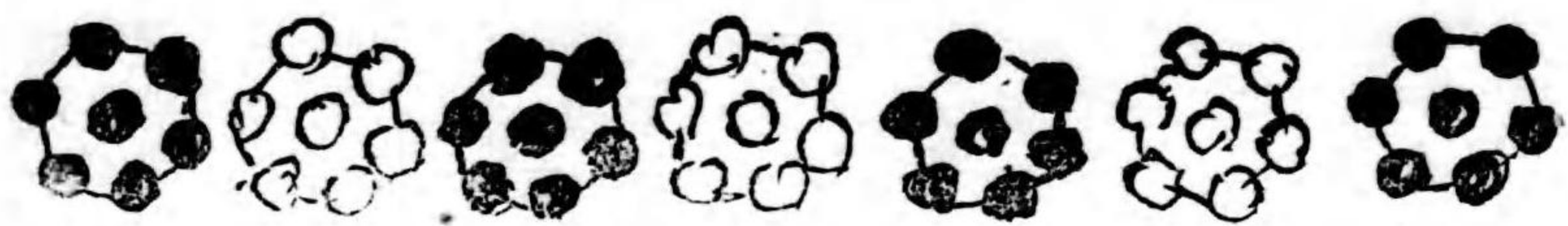
「ほんならもう八年も前のことになりますかいなあ。澤市の云ひ草やおへんけど月日の經つのは早いものどすなあ。」



「ほんまにいな。」と、春之助はのべの細い煙管をはたきながら感に耐へぬやうに云つて、「そやけど、あんたはんと、雛勇はんの噂もえらい久しいものどしたえなあ、ほんこの頃まで祇園では話の種に出ましたえ。私はせんど長いことで萬壽小路のお師匠はんに逢ひましたらな、どないにしろあやす云ふてなあ、あんたはんのこときつう問うてやはりましたえ。ほしてな、あの人が祇園で初めて雛勇はんをひいて出やはつた時の話が出てなあ、何やしらきつうしゆんでやはりましたえ。」

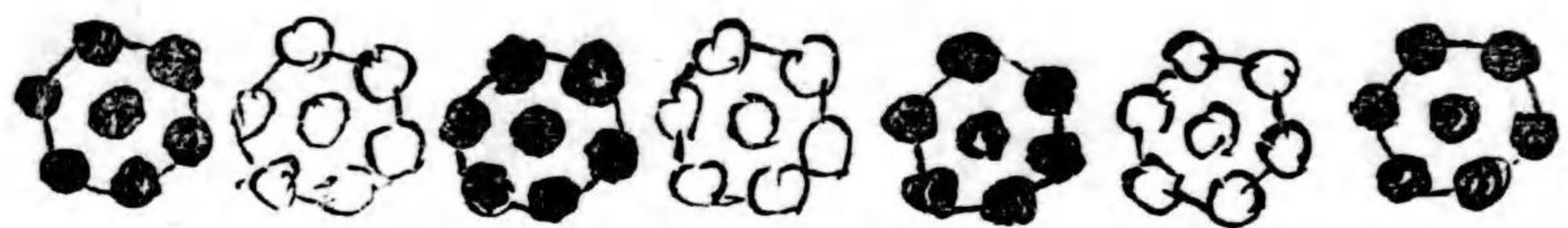
松岡さんは眉ひとつ動かさずにじつと飲みさした盃を見てゐた。黒い瞳の底には折々悲しみに彩られた深い心持が静かな焔のやうになつて映つたり消えたりした。





女將はそのさまを見てゐるうちに身につまされてか、や  
 けて村上さんの方を顧みながらひそやかな聲で、  
 「ほんまに今夜のやうな晩どしたなあ。もうあすは伊勢へ  
 往ぬちうて雛勇はんがきつう泣かほりましたやないか。ほ  
 て夕方から私の家の離座敷でお炬燵をして皆で別れのお盃  
 をしたやおへんか。」

「さうやつたなあ。あの頃は春千代もまだ舞妓やつたなあ。」  
 「ほして春千代はんがもう一生逢へんいはいつて聲を立て  
 てお泣きたもんやて皆にはかに悲しうなつてなあ松吉はん  
 姐はんにきつう叱られましたえ。私よう覚えてる。」と、春  
 之助はその時の有様を思ひ起こすやうに眼を細めながら云  
 った。

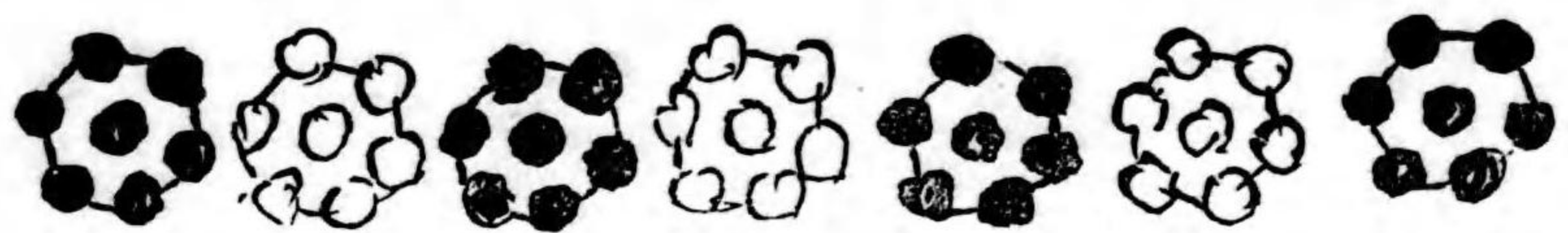


「さうどしたなあ。ほんまに何處ぞ遠い遠い外國へでも行  
 かはるやうに云ふて、泣きましたえなあ。」と、薄く笑ひな  
 がら女將は云つて、松岡さんの方を顧みながら、  
 「あんたはん覚えてるやすか。」

「覚えてらんでどうする。あの晩のことはいつまでたつて  
 も忘れやへんせ。」と、松岡さんは平常とまるで違つた感傷  
 的な調子で答へた。そして耐らなくなつたやうに盃を執り  
 あげながら、「今頃はどないにしてゐるやろなあ。もうこの  
 二年ほど少許も消息もないが……。」

「それがな。私達もどないになつとゐやすかちよいとも知  
 らなんだんどつせ。ほしたらなあ、ほん十日ほど前どした、  
 私ふつとな、君蝶はんからあの人のこと聞きましたえ。」と

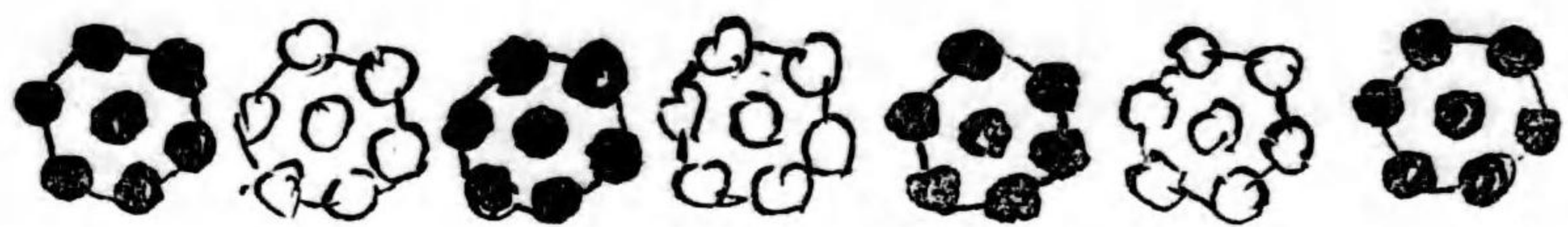




春之助はその言葉と一緒にひと膝のりだして、「せんど君蝶はんがなお客はんに連れられてお伊勢はんへ詣らはつたんどすて。その折な桑名のお茶屋で雛男はんに逢はつたさうにおつせ。何たら云ふた、菊葉はんやつたかいな、そんな名で出てやはつてな、町でもえゝ藝妓はんのうちやさうにおつせ。」

「誰やつたかもそんな話をしとつたが、そらほんまの雛男か何や分らんぜ。僕はどないにしてもあの女はもう死んでしまつたやうに思はれて叶はんのや。」と松岡さんは真顔で春之助の顔を見つめながら云つた。

「阿呆らしい。そんな嘘の悪いこと云はんとおゝきやすなそらほんまの雛男はんちう話どつせ。自分で私は祇園にゐる



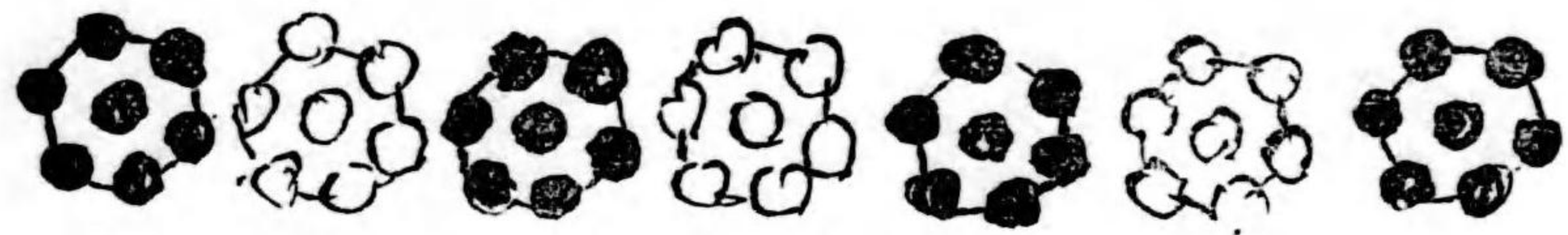
た雛男どすて君蝶はんに云はつたんどすさかい、此れより確かな證據はおへんわなあ。」

女將は幾度か合點いた。

一座はそれから雛男を中心に置いて松岡さんと彼女との間に起つたさまざまの哀深い戀語りに耽つた。十四の時から思ひそめて、十八の冬、伊勢路へ身を賣られてゆくまで互に思ひ思はれた奇蹟のやうな二人の運命はいつまで語つても語り盡せないやうな話題を次から次へ與へて行つた。

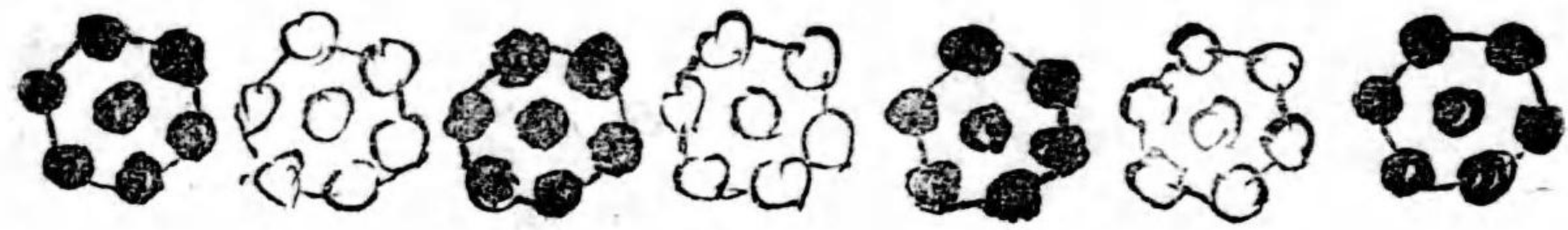
私は丁度濃淡のけぢめも分らないやうになつた昔の繪巻ものを繰りひろげてゆくやうな懐かしい心持ちでその話に聞き入つた。それからそれと場景が移つてゆく度に私の眼の前には數限りない幻が湧き上つて、まだみづみづしい顔





色をした若い松岡さんと、見も知らぬ美しい舞妓の雛勇とが四條河原の涼みや、祇園の夜櫻や、蠟燭の火影や、優しい行燈を誇りとした時代の祇園を背景として種々に織り紡いだ運命の絲が私の眼には此の上もなく美しく映つて來た私は皆の話に耳をかしながらいつか夢のやうな幻影を虚空のなかに見出してゐた。

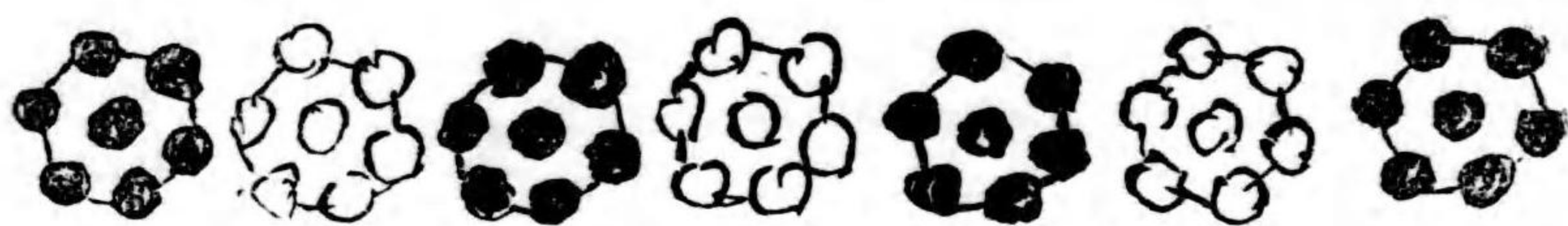
……もう夜の十一時を過ぎて後のことである。若い松岡さんは最後の都踊りの幕が落ちる少し前に慌たしく立上つて、人蒸息にむされた観客席から人氣の薄い下足場へ出て來た。そして年老つた下足番の老爺が水鼻汗を啜りながら差し出す駒下駄をつつと爪先へ突懸けて、そのまゝホテルの車が梶棒をならべてゐる小路をぬけて曲角のつゝ



きにある樂屋口の方へ廻つた。そして燃えつきた篝火の光に照らされながらしよんぼりと土塀の際に佇んで都踊から歸つて來る舞妓の雛勇を待つた。

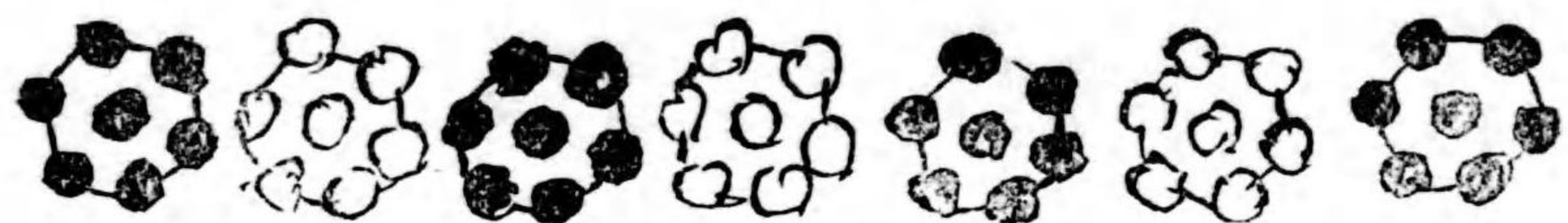
圓山の枝垂櫻がもうちらほらと散りそめやうと云ふ頃なのに、京の街にはまだ冬が名残りをとめて宵々ごとにはしつとりとした寒氣を含んだ風が何處からともなく人の肌を迫つてくる。その晩もさうした風が静かな嘆息のやうに吹満ちて、篝火のかすかな焰を甜めると一緒に戀に燃えた松岡さんの胸にもしみじみと滲み徹つて來た。しかし彼はまだ醒めきらぬ夢のやうに織り出されては潰えてゆく踊りの場面の艶やかさに酔はされて、そのなかでも殊に美しく粧つた雛勇の舞姿が眼の底にえりつけられて離れない。そ





して幕があく少し前に、花道の溜りの揚幕の陰から臙脂の燃えた頬を斜につき出してにつこり笑ひながら、

「雛勇どつせ。分つてますか。あのなあ、歸りに門で待つてとくれやすや。」と小聲で囁いたその言葉が耳の底で幾度となく繰り返へされて、彼には今宵の逢瀬が何とも知れぬ甘い魅力に充ちた心持ちを以つて待ち設けられるのであつた。場内では祇園囃しの太鼓と鉦の音が遠く幽かに鳴りだした。それとともに三味線の音色と唄聲が急に賑やかに練れて来て、そのぞよめきに送られて花環のやうに美しく揺れながら引込んでゆく舞妓達の姿を思ひ續けてゐると、やがて下足場の方で歸りを急ぐ観客の騒々しい動擾が聞え出した。早いものはもうぞろぞろと群をなしてほの暗い篝火



のなかを歸つてゆく。

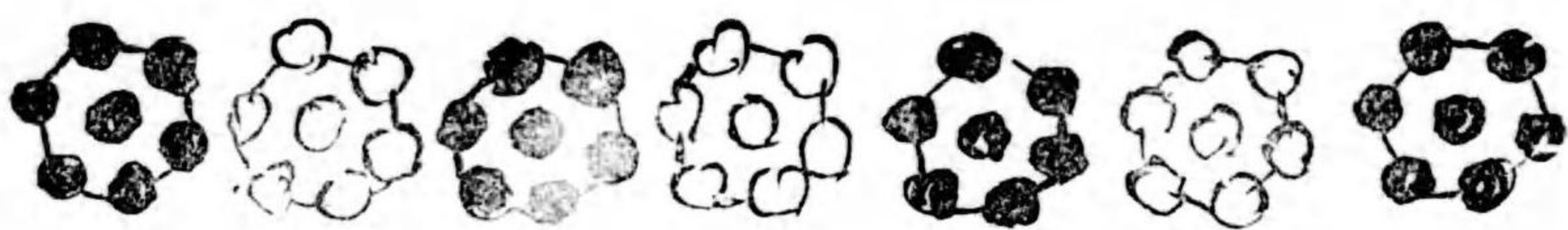
「おかあはん。あてえのこぼこぼがみえんわ。何處へいたんやろ。」と、甘えるやうに叫ぶ聲に驚かされて、ふと樂屋口を覗きこむと、小行燈の點つた細路次の彼方には踊りから歸つてゆく舞妓や、藝妓の姿が幾人ともなくみえだした。

「春勇はん。あんたはん何處え？」

「あてえなあ、萬竹はんへいて、それから大勝はんへ廻らんならんの。」

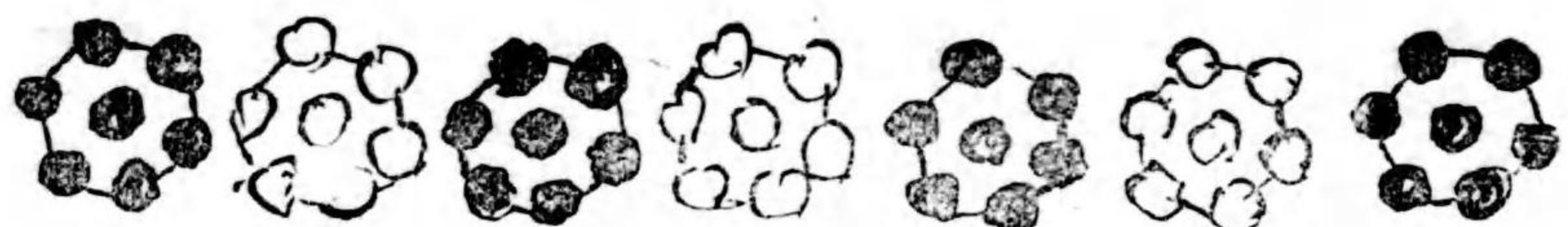
「さうか、えゝことなあ。大勝はんやつたら川島はんで寄せてお貰ひるのやろ。後で私も知らして貰うて欲しいわ。」  
「きつい氣やなあ。あとでさう云ふて知らして貰うて上げますわ。」





など、口々に小鳥のやうに囀る聲が聞えて来る。  
 松岡さんは俄かに破れるやうな激しい胸の動悸を覺えて  
 思はず壁際へびたりと體を押しつける。と、その時、門口  
 からは幾人かの舞妓が芋艸や、婢衆に連れられてこぼこぼ  
 の優しい鈴を踏み鳴らしながらついと歩み出て来る。前髪  
 いっぱいに挿しかざした花簪の青や紅を美しくゆらめかし  
 て、人形のやうに濃く彩つた臙脂や白粉をほの暗い篝火の  
 前に浮き出させて、しんなりと羽織つた縮緬の羽織も此の  
 うへなく艶かしい。

「ほ、松岡はん。先日はおほきに。何しとゐやすの。」と、  
 一番最後に出て来た一人の舞妓はつゝと松岡さんの方へ  
 走り寄つて来て聲をかける。



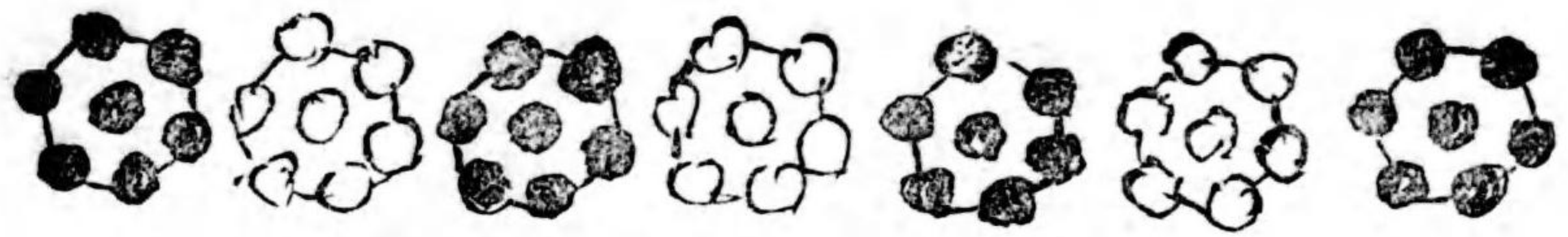
「お、小菊はんか。」と、松岡さんは不意を喰つたので、言  
 葉も出ないほどどきまきしながら、「もう踊りは済んだのや  
 な。」

「いま濟みました。こんな處へ立つて何しとゐやすの。」と  
 その舞妓は思惑ありげな笑ひを口のほとりに漂はせながら  
 云つた。

「なにで、待つてんならん人があるもんやさかい……」  
 「ふん、雛勇はんどつしやる。まあ、どうえ。きつい氣ど  
 すえなあ。」

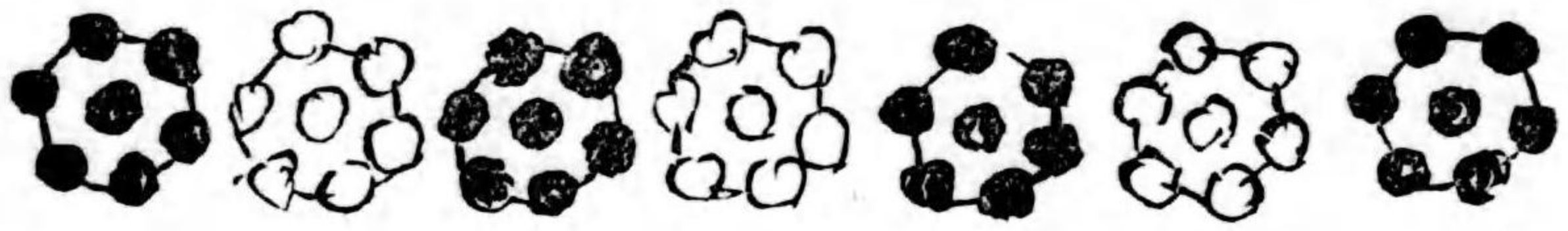
「そんな大きな聲で云ふたら人に聞えるがな。」と松岡さん  
 は周章で、掩ひかぶせるやうにその言葉を抑へる。  
 「人に聞えたかて宜ろしいやないか。」と、小菊は可愛い唇





をつぼめて笑ひながら、「もつと大きな聲で云ふてあげまへうか。ほゝゝゝ。そやけど雛勇はんはもうちつきに出て来やはりまつしやろえ。せいらい待つといでやす。」

そこへまた樂屋口から七八人の藝妓と、舞妓が賑やかに笑ひ崩れながら歩み出て来た。見知り越しの誰彼は松岡さんがゐるのを見附けると一人二人づゝ周圍へ寄つて来て、小菊とさゝめき合ひながらたつた一人の松岡さんを駈りだした。彼は幾度かそれをはづさうと試みたけれども到頭駄目だつた。舞妓達の優しい言葉はあるかなきかの蜘蛛の巣のやうに體のまわりへ絡みついて、松岡さんは憐れな囚人のやうに肩をすぼめながら益々土俵の方へ身をすくめた。と、なかでも一番柄の大きいひとりの舞妓は突如松岡さん



の袖をとつて、

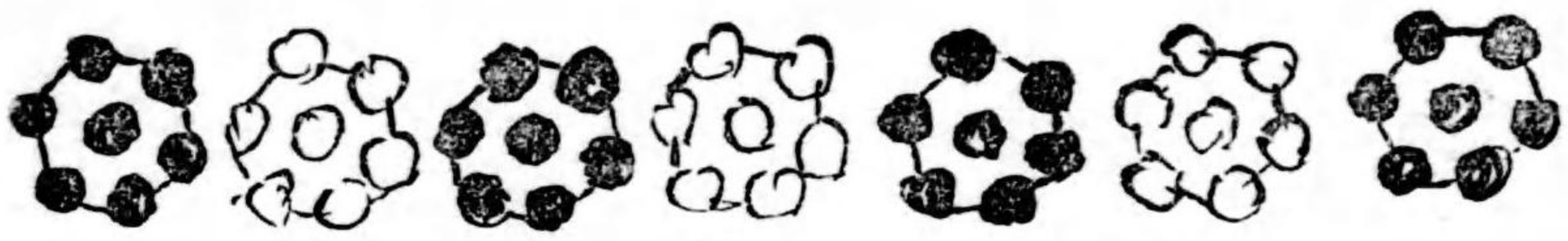
「松岡はん。えゝこと云ふて上げまへうか。雛勇はんはなあ、ほんまにいけずどつせ。今な大勝はんから逢ひに来やはつてな木屋町へ行かはりましたえ。旦那はんで寄せて貰ふのや云ふてな、きつう嬉しさうにしとゐやしたえ。」と、云ひさして、すぐ傍に立つたいま一人の舞妓に眼顔で合圖をする。と、その舞妓は急に眞顔になつて

「ふん、さうどしたえなあ。ほんまに悪い人どすえなあ。私等やつたらどないにしたかてあんなてんがうは晴れがまうして云へんわ。」

「さうどすなあ。そやさかいにもうあんな怪體な舞妓はん待たんとおゝきやす。ほして私等と一緒に往にまへういな。」



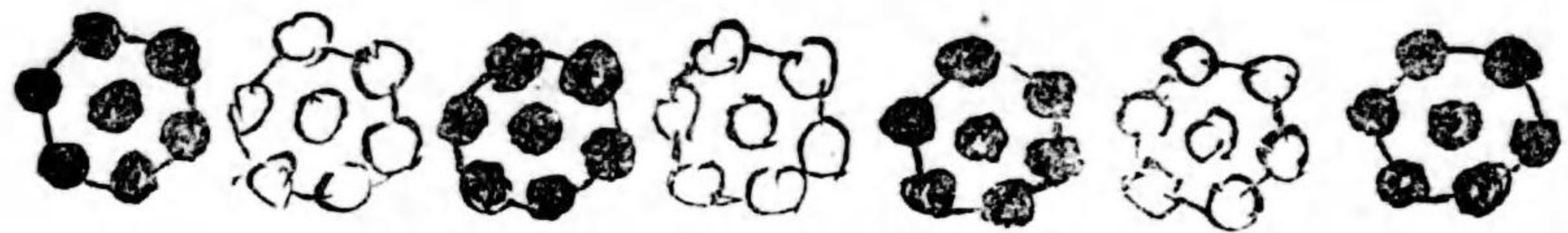




松岡さんは恥かしさと、氣拙さに頭が混亂して返事をすることさへ出来なかつた。唯黙つて俯向きながらふらふらと歩み出した。そして舞妓の群に包まれたまゝ、花見小路から低い葦の續いた賑やかな四條通りへ出た。

ほの暗い行燈や、紅提灯や、約ましやかな店明りに飾られた狭い街筋には夜更とも思はれぬ雑沓が流れてゐた。夜櫻から歸つて来る人々は酔ひの出た顔を薄闇のなかに浮き出させながら行きずりの女達に戯言を浴びせかけたりなぞしてゐた。そして万亭の角から四條大橋までの間は都踊歸りの人の群も交つていやが上に賑はしさを添へてゐた。

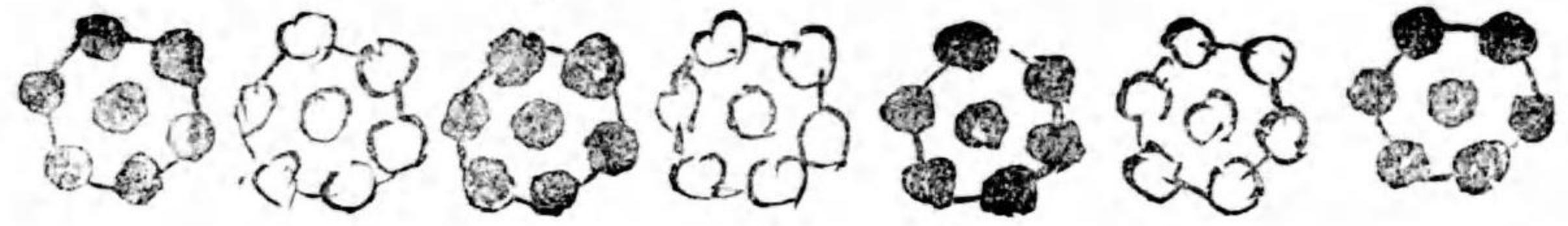
松岡さんはともすると迷れさうになる舞妓の後からとぼとぼと歩いて行つた。後髪をひかれるやうに今思ひ捨て、



来た樂屋口が頻りに氣になつてはゐたが、と、云つて今更後へ引返へす譯にもいかず、強い力に誘はれてゆくやうにひどく氣を落してついて行つた。そして心の底では取留めもなく雛勇の美しい姿を追ひ求めて、木屋町へ行つたといふことが何だか夢のやうでまるつきり信じられなかつた。

「なあへ、松岡はん。ちよつとお勝はん姐はんの處へ寄せて貰うたらいきまへんか。」と、云ふ聲に驚かされて、ふと顔をあげると、彼はいつのまにか祇園の細い小路を横へきれて絃歌のさんざめきの充ち溢れた街へ來てゐた。小松といふ彼のいきつけの茶屋の行燈がすぐ鼻の先に見えて來た。「行てもえゝけど、今夜は忙がしさうやから又の時にせう」と、松岡さんは氣が進まぬやうに呟いて、それとなく遁げ





ようとしたが、舞妓達はなかなか承知しない。

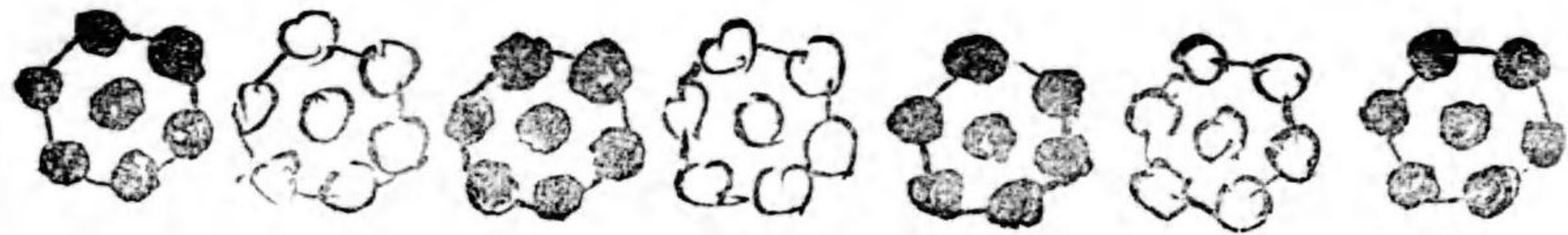
「そらさうどつしやる。雛勇はんが来やはりまへんさかいなあ、早う往にたうおつしやる。」

「早う往んで夢でもおみやしたらえゝわ。」

「ふわあ、きつい氣。」

三人の舞妓は家のなかへ聞えよがしに聲をあげて囃した。松岡さんは今更否みかねて到頭その儘茶屋の潜り戸をあけた。

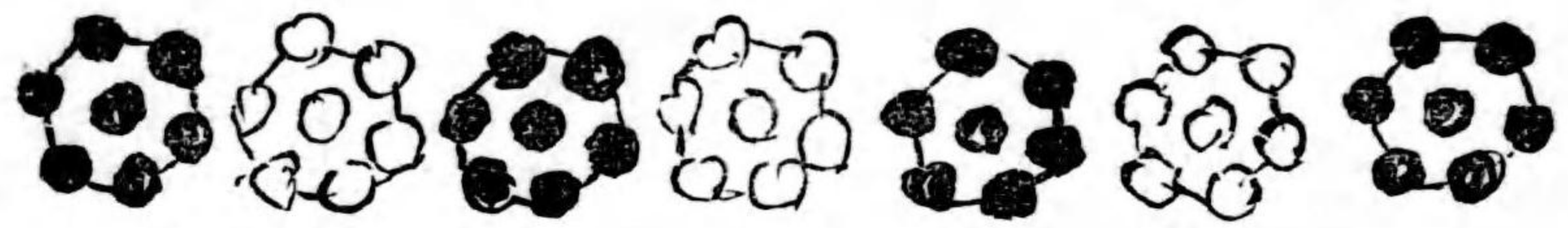
それから半時ばかりの後、松岡さんは小松の奥座敷で嘆きわづらふやゝな寂しい白川のせゝらぎに聞きとれながら頻りに深い思ひに沈んでゐた。座敷に残つた二人の舞妓は蠟燭のほの暗い火影に華やかな姿を浮きたゝせながらそば



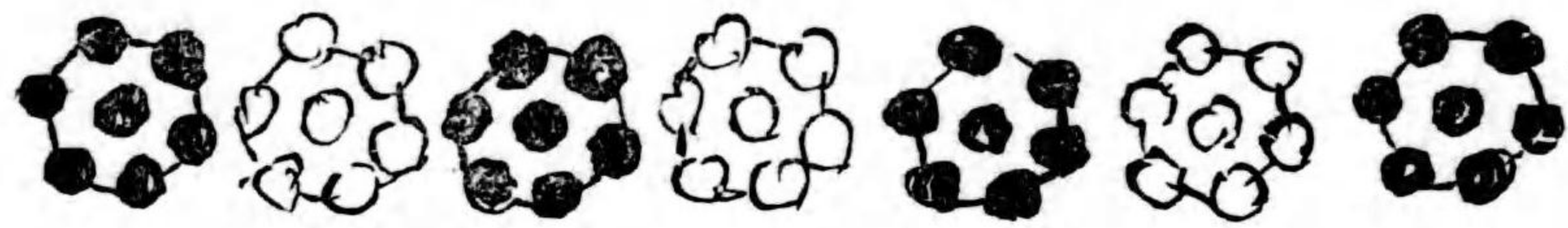
に人のゐるのも打忘れて多愛のない噂話に耽つてゐた。その時門口の方でふと疳高な女の聲が聞えた。人と云ひ争ふやうな、激した調子で頻りに何かくどくどと訴へてゐる。耳をとめてきくとその聲は正しく雛勇だつた。

「ほ、雛勇はんや、松岡はん、来やはりましたえ。嬉れしうおつしやる。」と、舞妓達はびたりと言葉をやめて等ひながら松岡さんの方を見た。そして暫らくの間聲をひそめて聞いてゐるとやがて廊下を渡る足音が近づいて来て、仲居の後から雛勇がひどく浮かぬ顔容をしてよんぼり入つて来た。「松岡はんのいけず。よう覺えとるやすや。」と、彼女は座敷へ入ると突如松岡さんの傍へ寄り寄つて恐い眼眸をしながら彼の肩を強く打つた。



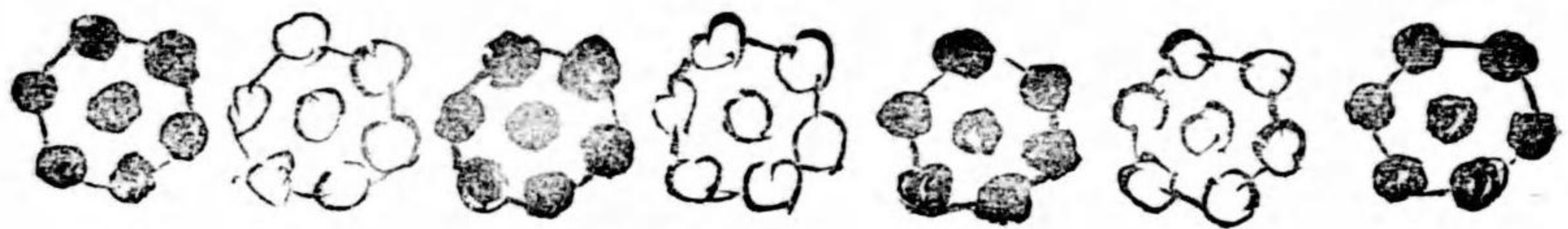


「あれ、雛勇はん何をさしやすのえ。阿呆らしい。」と、仲居が慌てゝとめるのも聞かず雛勇は又手を振りあげて、  
 「ほんまに貴方はんのやうないけずなお方私知らんわ。あんなに待つてとくれやすや云ふてんのに小菊はん達と一緒に往んでしまはゝつて、……」と、急に涙聲になりながら振りあげた手で長い友禪の袂を握つて「私貴方はん好きと違ひまつせ。もう貴方はんのやうなお方厭どす。」  
 「何いふてんのえ。なんぼ待つたかて貴女が出て来やへんのやないか。」松岡さんは餘りの劍脈に驚ろかされて、妙にれた笑ひ方をしながら辯解らしく云つた。  
 「嘘どつせ。嘘どつせ。私ちやんと知つてます。貴方はん小菊はんが好きやさかい私たつたひとり置いて往んでしま



はゝつたんにやわ。」と、雛勇はその儘傍を向いて激しく啜泣しだした。  
 仲居もほかの舞妓達も呆れてそのさまをみてゐた。松岡さんも手の出しようがなくて、悲しげな顔容をしながら彼女の眞白な襟脚をみつめてゐた。と、雛勇は泣くだけ泣いてしまふと、今度は急に冷たい顔色になつて仲居の方を顧みて、  
 「姐さん、えらい濟まんことどすけど、私もう往なして貰ひますわ。」と、きつぱり云ひ切つた。  
 「又出さはつたえなあ。そんな阿呆らしいこと云ふたかてあかしまへん。あなたはん舞妓はんやないか。」  
 「さうかて、さうかて、……」と、彼女は駄々をこねるや

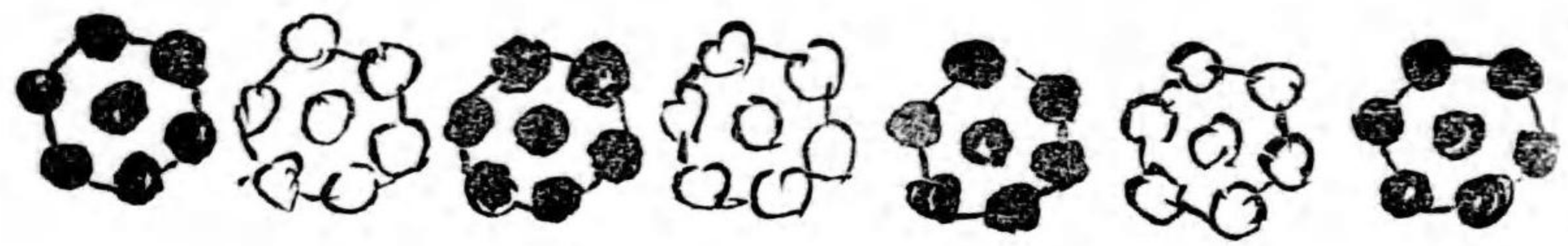




うに肩を揺りあげながら呟やいたが、やがて又傍を向いて  
しくしく咽び泣きしだした。そして今度は何と思つたか溢  
れ出て来る涙で指先を濡めして、眉根にひいた臘脂や、唇  
の濃い紅を矢鱈にひきのばして厚く化粧した白粉の地へま  
るで切られ與三のやうにさまさまの醜い線を描いた。そし  
て疳が昂ぶつて来るやうに時々激しく肩をふるはしては聲  
を呑んで泣き續けてゐたが暫らくするとその儘ついと立ち  
上つて、燃えたつやうな美しい友禪の裾をしどけなく踏み  
しだきながらばたばたと座敷を出て行つた。

一座は呆氣にとられて唯ぼんやりその跡を見送つた。そ  
してひそやかな足音がふつりと消えてしまふと、仲居は先  
づ口をきつて、





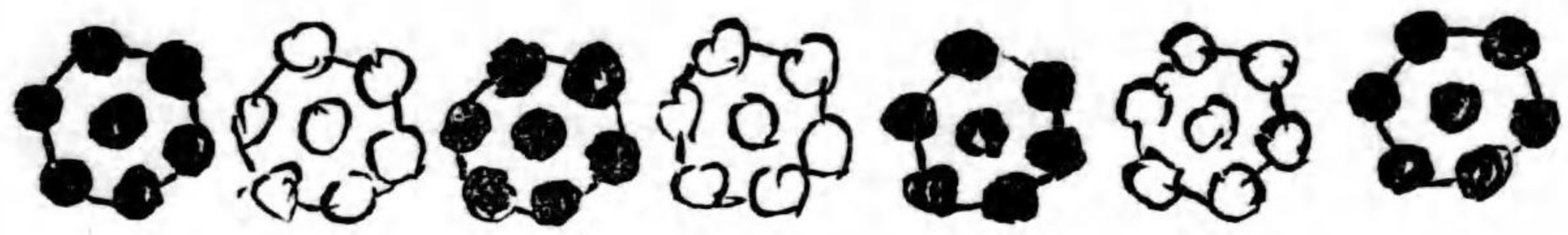
「怪體な人どつせなあ。どないせうちうのやろ。」と、獨語のやうに云つたが、やがて松岡さんの顔を見て、

「あの人のやんちやにもほんまに困りますえなあ。怒らんとおきやすや。いつでもこれどすさかい。」

「怒らへんけど、なんぞ……氣にさわつたことでもあるのやろか。」

「さうどつしやろなあ。ちよいとかれて思ふやうにならんと、誰方はんの前でもあれどすさかいなあ、舞妓はんにしては少しいきすぎてますわなあ」と、仲居は嘆息をつきながら云つて、「あんな氣やつたら今にきつと苦勞しやはりまつせ藝妓はんにはつた後かてあの氣象がなほらなんだらきついに苦勞しやはるに極まつてます、世の中ちうものは





さう思ふた通りに行くもんやおへんよつてになあ、ほんまに損な性分どすわなあ。」

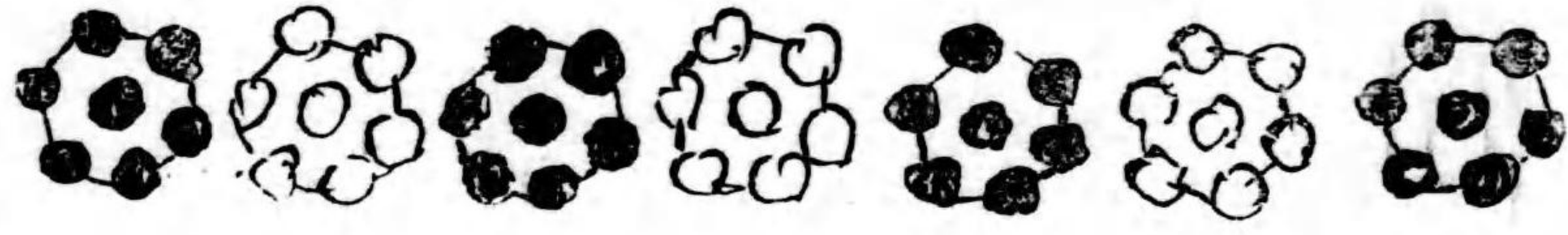
「そやけど」と、松岡さんはその言葉も碌々耳へ入らないやうにそわそわして、

「また何ぞ無茶をしやへんかしら。一寸後を追うていて悪いところは謝る云ふて呼び返へしてんか。」

「そんなに心配おしやはんかて宜しいがな。もう放つときやす。今に歸つて来やはりますうがな。」

「いや、頼みやさかい連れて来てんか。」と、松岡さんは眞實を頼にあらはして云ふ。

仲居も到頭その言葉を否みかねて、座敷を出て行つた。そして暫らくすると帳場の方から袖で顔を掩ひながらせぐ



り泣いてゐる雛勇をなだめつ慍かしつしながら連れ歸つて来た。

「さ。もうそんなやんちや云はんと、ちんと涙をふいて面白う遊ぶの。舞妓はんは舞妓のやうにしてゐんと人が笑ひまつせ。さ、こゝへ来てお坐りやす。」と仲居は彼女の肩を

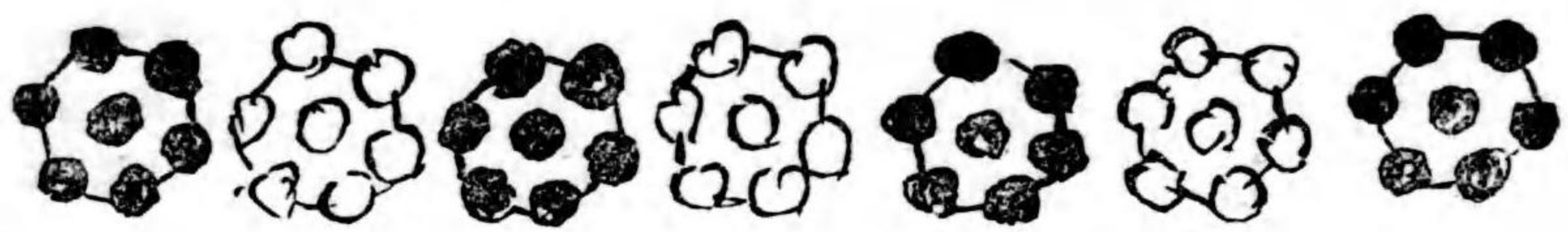
抑へて松岡さんの傍へ坐らせる。そして袖をひいて、そつと顔を差し覗かうとすると、彼女は其の儘紅友禪の八ツ口

をだらりと小さな膝の上へこぼして、眞白な手で突如顔を掩つた。散々描きちらした紅や臙脂はいつのまにか涙で溶

けて、面長な眼の細い顔が何んとも云へないほど滑稽けてみえた。

「まあ、まあ。怪體な顔やなあ。」と、仲居は思はず噴笑だ



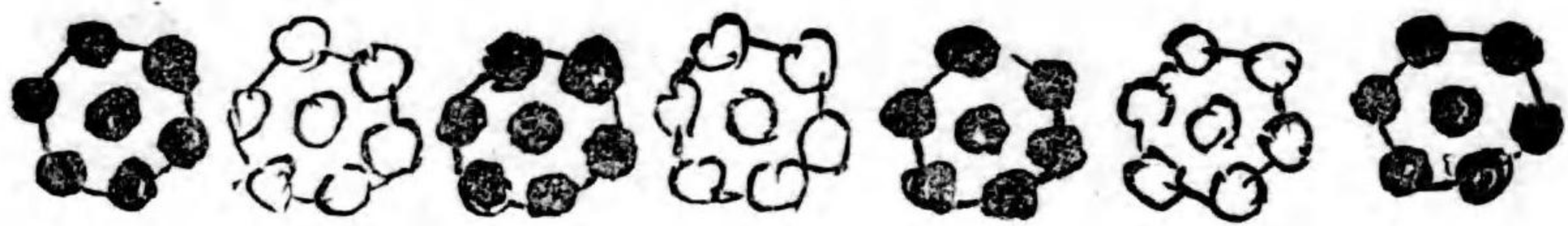


して云ふと雛勇はなほ固く顔を掩つて今迄とはまるで違つた牙えざえした聲で、

「そんなにお見やしたら、晴れがましようて叶はんわ。」と、云つた。そして白魚のやうな繊細い指の間から見える玉蟲色の小さな唇にはいつかもう優しい微笑みが綻びてゐた。……

かうした取留めもない幻を追つてゐるうちにふと私の耳にはまたひそひそと呟やく女將の語聲が聞えて來た。雛勇の昔語りから深い感情が一座の人々の胸に滲んで、ほの暗い蘭燈の火影のさゆらぐ間内の氣勢は何處となく行きつめたやうな悲しみに喘いでゐた。

女將は訴へるやうな低い調子で猶ほも語りつゞけて、



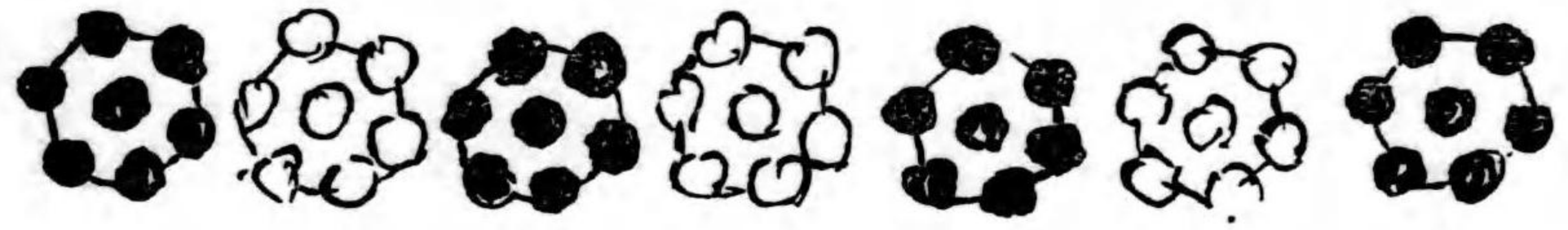
「桑名といへば近いところどすさかい、お立ちやす前に一遍逢ひにお出でやしたらどうどす。また逢ひ度いとお思ひやしたかて、遠い遠い外國からやつたらなあ。……」

「さうどす、さうどす。ほんまに逢ひにいておあげやすな。」と春之助も真面目な調子で云つて、「雛勇はんら永いとどすさかい、どないに嬉しうお思ひやすか知れまへんえ。」

「そやなあ。」松岡さんは腕ぐみをしたまゝ考へ深い眼眸をしてゐたが、やがて痰のからむやうな低い聲で、

「そやけど、永いこと逢はんのやから、お互に境遇も違てるし、また心持ちも違てるしなあ、今度めに逢うたら却つて怪體なものになるかも知れんぜ。」





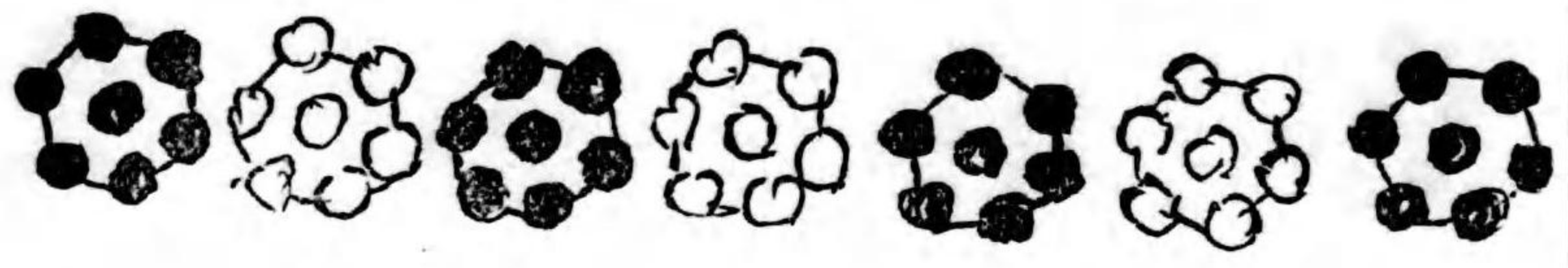
「そらなんとも知れまへんけど、……雖勇はんやつたら決して貴方はんのこと忘れとるやす様なことはおへんえ。あゝ云ふ質の人は體はあんじようにしてゐたかて、きつう執着的強いものどすさかいな。」

松岡さんはそれを聞くと微かに肩をふるはしたやうだつたが、やがて熱のこもつた調子で、

「しかしまあ逢はん方がえゝやろ。逢ふてつまらん思をするよりも、今迄のことを私の胸に大切に藏まつて置く方があとで後悔せんで宜しいわ。いつ思ひだしてもえゝ夢やつたからなあ。」

一座はその儘口を噤んでしまつた。

私は何となく引き入れられるやうな氣持ちになつて、彼

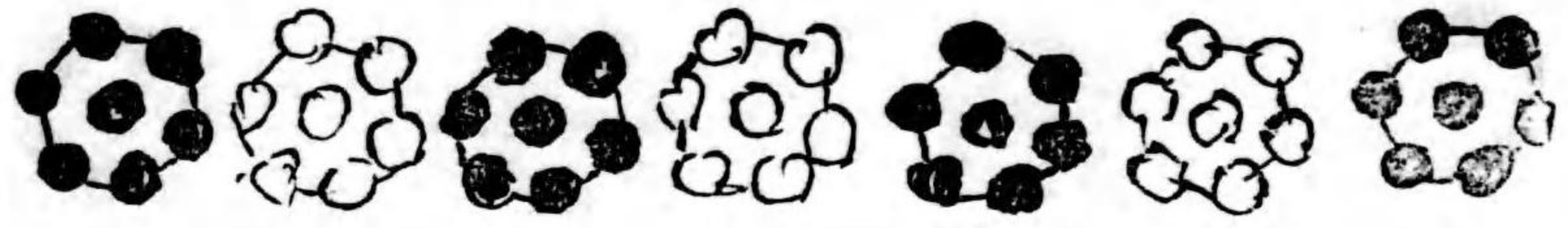


等から顔をそむけて障子の腰硝子からすぐ下に展がつた加茂の磧を眺めた。

月はいつしか西へ廻つて朧ろげな冷たい光だけが靄のやうに四邊にたちこめてゐた。薄黒く浮き出した東山の山影や對岸の低い家並みや、處々に瞬く小さな燈の光も霜夜の静けさの底に凍てついて、何處をみても春の思ひ出を懐かしませるやうな温かさが潜んでゐやうとは思はれなかつた。そして磧には灰色の小砂利が裸に現はれて、す枯れつくした河原蓬の原には二三日前に降り積つた薄雪が斑のやうなところどころに消え残つてゐた。そして川水がその間にきらりと銀鱗を碎きながら流れて、静まりかへつた大氣の底に優しいせゝらぎの音だけが綿々と咽せんでゐる。



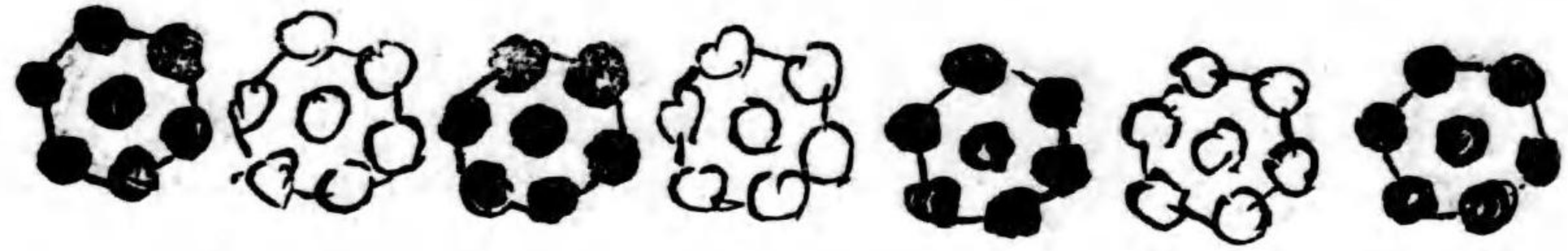




女將は暫らくすると又聲をひそめて、

「そやけど、ほんまに今頃はどないにしとゐやすやろな。こんな月のえゝ晩には京のことやら、松岡さんのことやら思ひだして、どないに辛い思ひをしとゐやすか知れんわなあ。」

「ほんまにいな。あんな性分の人やさかい私らにはようその心のうちが察しられますわ。……今の身では京へ戻るちうたかて叶はんやろしな、桑名から又その先々と流れていて、末はきつとようないにきまつてまつせ。私も若い時分から随分色々な人にも逢うて知つてまつけど、あんな性分の人は大難儀な身の上に落ちやはるものどつせ。」と、春之助は年寄りらしい愚痴つぱい聲で云つた。



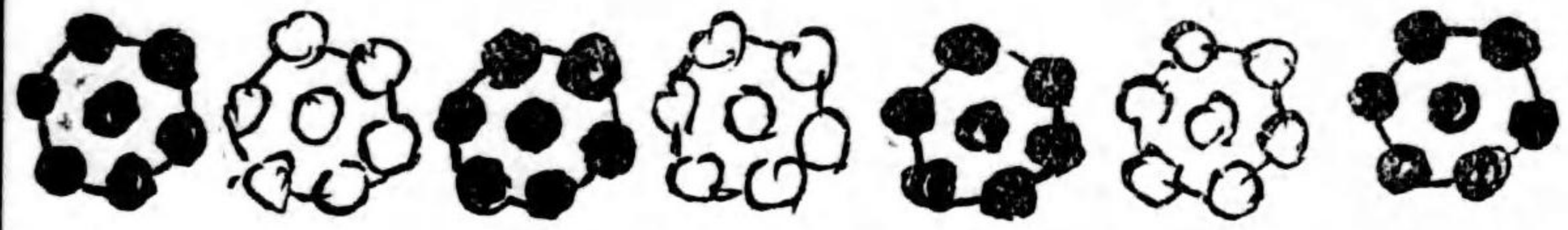
「ほんまに可愛さうな人どすえなあ。」女將はそれを聞くと涙ぐむだやうな頼りない聲でしみじみ云つて、その儘低く首を垂れてしまつた。……

縁先には松の小枝をそつと揺るがせながらひそやかな風が音もなく吹いて通つた。と、その途端に廣い磧の何處かで二聲、三聲續けさまに寒さうな千鳥の聲が聞えた。

「ほ、千鳥が啼いてますえ。」と、春之助はそれを機に燈から顔をそむけて袖口で人知れず涙を拭いた。

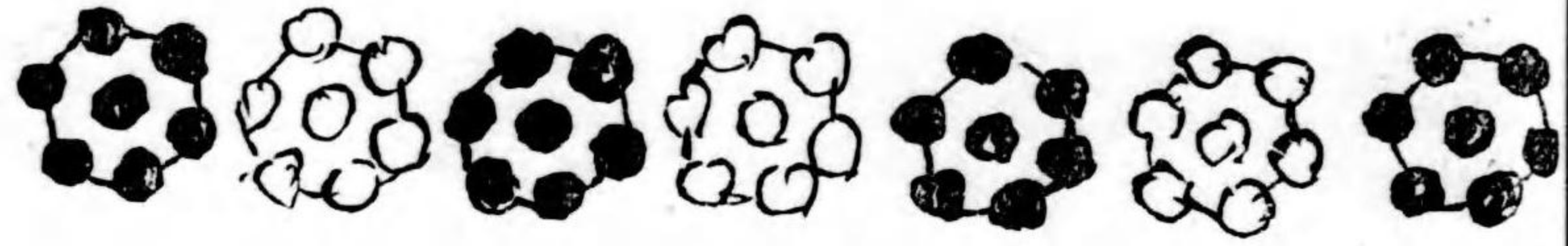
私はその時、「河風寒く千鳥なく……。」としめやかな聲で唄はれる端唄の心持ちを思ひ起こして美しい舞妓だつた雛勇の面影と遠い旅路に出てゆく松岡さんの心とをしみじみ胸の底で繰返へしてみたが、そのうちにいつともなく寂し





い影が心にたち添つて來、口には云ひ盡、せぬ哀愁が次々と限りなく湧きあがつて來た。





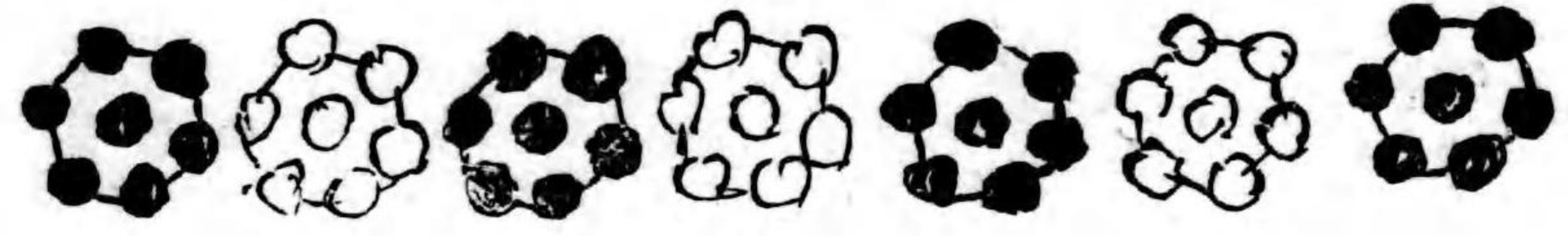
山月夜忘れかねつも  
 ただふたりそと抜け出でて来しからに圓



圓山

往かずやと誘ひしは誰なりけむ。二人ひそかに酒の座をすべり出でて、霜白く置く路をいそげば、落人のこときこちこそすれ。

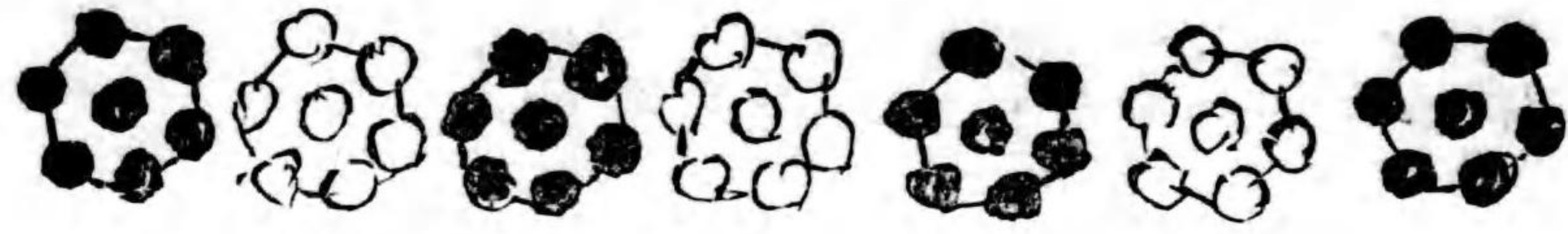




消 息

うれしき文、悲しき文、はやくも儼にあふるる程に  
なりぬ。

このころは君のここのみ夢見ると云ふ文  
來れば京の戀しき  
舞ころも取り出だしては泣くと云ふ病み  
たるひとの文もとどきぬ

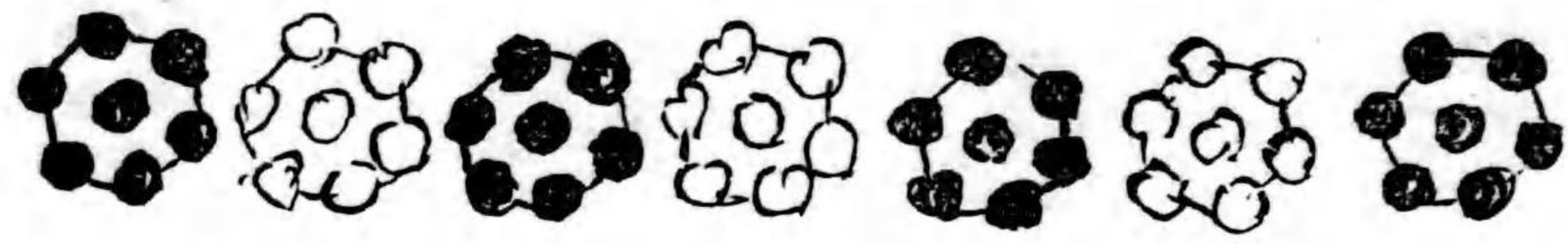


白 朮 詣

大つもごりの夜となれば、祇園をゆく人ひとりとし  
て火繩を持たぬものもなし。何をねがひの白朮詣ぞ。

もの思ひする間にあなや火は消えて悲し  
くなりぬ白朮詣も

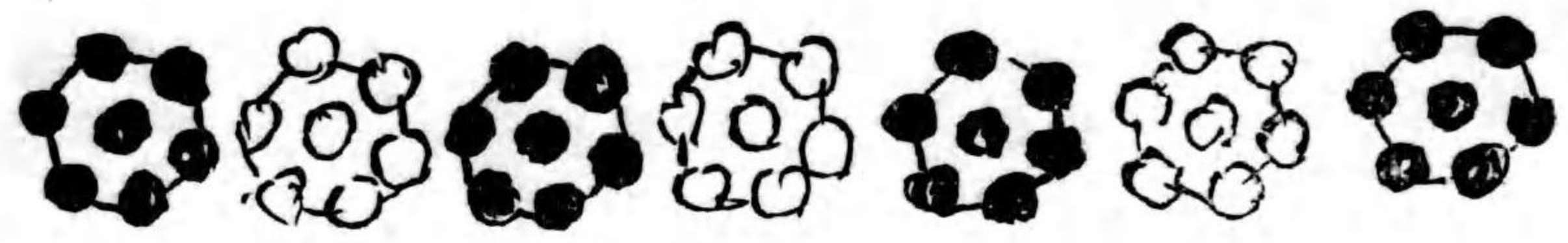




加茂川にうす雪降れば小夜千鳥水にこそ  
 啼け石にこそ啼け  
 わが胸の底をながるるかなしみに似て流  
 るるや加茂川の水

加茂川

千鳥よ、千鳥よ、悲しからずや。

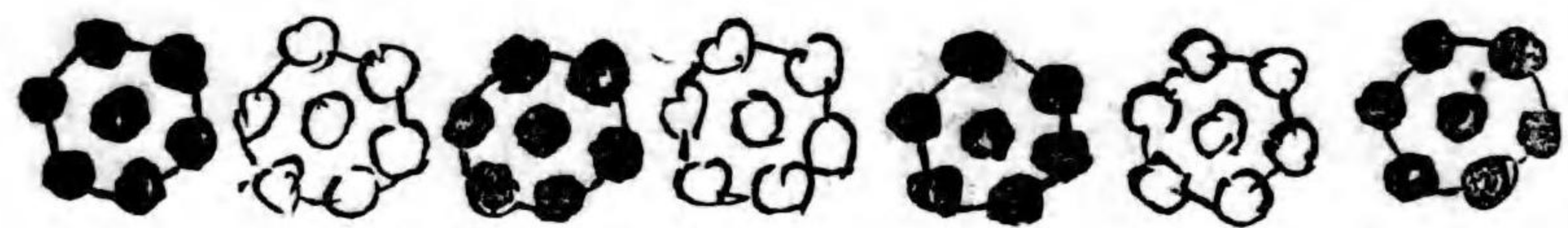


冬の夜

風さむし、戀もなき身に。

冬の夜は化粧するだに寒からむ胸おしろ  
 ひにぬぎし肌かな  
 寒聲や四條五條の橋の上の夜の霜いかに  
 君のゆくとき

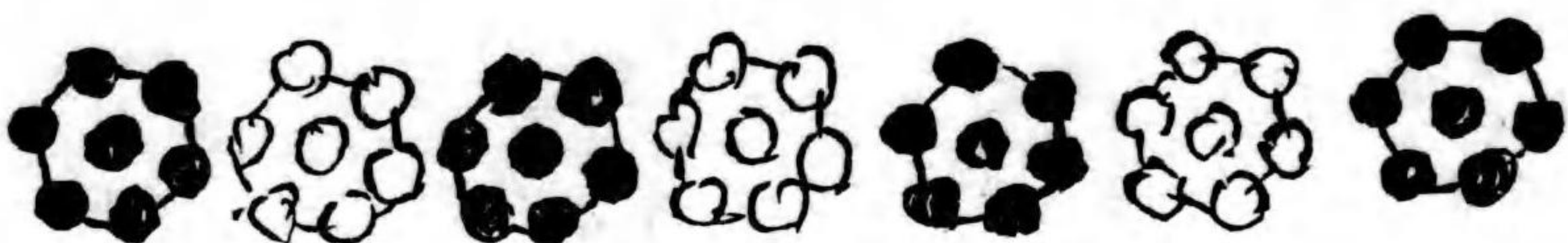




君にわかれ祇園にわかれなつかしき京に  
 別るる朝の雪かな  
 雨いつか雪になりぬと云ふころす末吉町  
 の冬のあけがた

雪

雪消えぬ、戀消えぬ、はかなの世や。

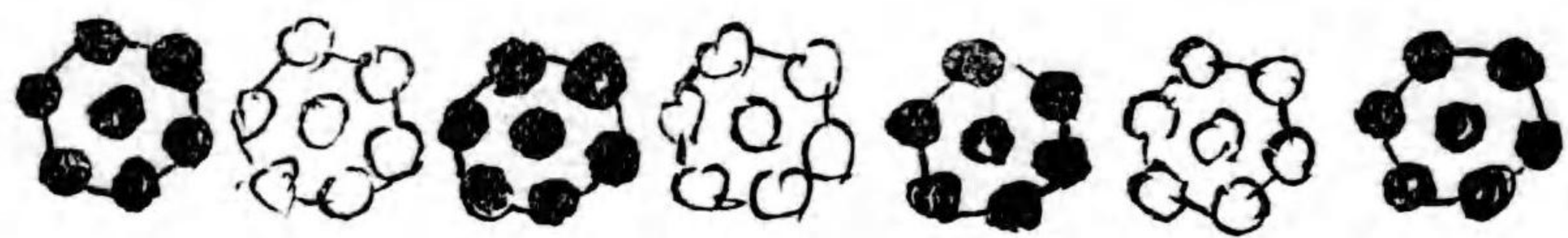


南座の顔見世ちかし澤潟屋來とうれしげ  
 に云ふは誰が子ぞ

顔見世

幟の音こころよくひびきて、顔見世の喧槽の梵天よ  
 りもたかし。

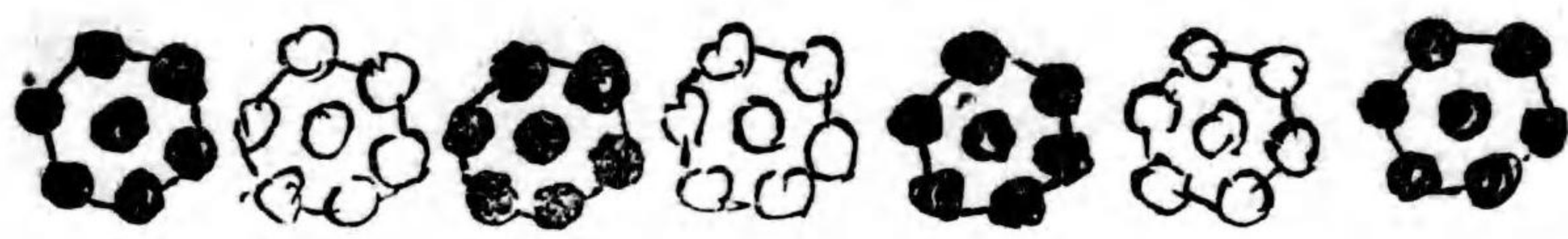




えし酒をすすりぬ  
 京さむし鐘の音さへ氷るやと云ひつつ冷

置炬燵に友誼の布圍かけて、酒に夜を更かすも京なればぞ。千鳥のこえ悲しげに聴こえ、咽ぶがごときせせらぎの音。

夜 寒



小 鼓

鼓こそ今は仇なれ。それも悲しき生形見。

冬ふゆの夜よの凍こてし鼓つづみをあふる手ての瘦やせしも  
 あはれ誰たれを戀こふらむ  
 伽羅きやらまくらすると思おもひてわれ借かりぬ君きみが  
 大事だいじの小鼓こつづみの箱はこ







大正五年九月廿五日印刷  
大正五年九月廿五日發行

定價壹圓四拾錢

著作權所有

著者

中澤弘光  
長田幹彦  
吉井勇

發行者

東京市麻布區坂下町十三番地  
北原鐵雄

印刷者

東京市小石川區西江戸川町廿一番地  
細登武四郎

印刷所

東京市小石川區西江戸川町廿一番地  
江戸川印刷株式會社

發行所

東京市麻布區坂下町十三番地  
阿蘭陀書房  
振替東京一四四八九番

阿蘭陀書房新刊書

文學博士 醫學博士 森 鷗 外氏著及譯

詩集 沙羅の木

四六版天金  
布製箱入

定價 八圓  
送料 八錢

近代獨逸詩歌の精粹を知らんとする人は本書を讀め

譯詩、デーメル、モルゲンステルン、クラアンド、ピヨルンソン、シヨツテリウス、  
歌劇、オルフェウス、  
詩、十八篇、歌百首

文學博士 上 田 敏氏撰註

小

唄

(忽三版)  
小形箱入  
高雅美本

定價 六拾錢  
送料 六錢

幽婉かぎりなきわが民俗藝術の精華を見よ

我國古來の小唄中最も調べ高く哀切の情きはまりなき山家鳥蟲歌及吉原小唄總まくりを收  
め周到なる註釋を附す。裝幀、外装なつかしきこと限りなし。

北原白秋氏著及畫  
歌集 雲母集

四六判天金  
箱入美本

定價壹圓五拾錢  
送料十二錢

壯麗を極めたる日本空前の大歌集  
「桐の花」以後の新作六百首と白秋氏の挿畫四葉(木版着色版)を収む。裝幀華麗きはまりなく  
清新比するにもものなし。

北原白秋氏著及畫  
抒情小詩 わすれなぐさ (並製)

小形布製  
箱入美本

定價 六拾五錢  
送料 六錢

最も懐かしく愛誦すべき抒情小詩選  
白秋氏の小詩中殊に歌ひやすく調やさしき斷章小曲のかすくをとりあつめれば懐かし  
きこと限りなし。皮表紙上製既に第四版を賣りつくし新たに清楚なる並製を發行し普く  
同好の士に願ふ。

吉井勇氏著 北原白秋氏裝  
歌集 未練

小形天金  
箱入美本

定價 六拾五錢  
送料 六錢

哀艶きはまりなき戀歌四百餘首  
内 未練、戀愛三昧、新弄齊、戀さめ、あだびと、おもひで、浴泉秘事、うたがひ、わかれ、  
容 紅燈拾遺、消息。

文學士 松村武雄氏著  
印度文學講話

四六判  
箱入美本

定價壹圓貳拾錢  
送料 八錢

世界文學の一大奇蹟

梨俱吠陀の神話の幽玄、神呪吠陀の詩歌の瑰奇、ラーマヤナ、マハーバラタの二大英雄詩  
の雄麗、情熱火の如きシヤクンタラー其他の戀愛劇の梗概十數篇を収む。豊麗にして燦爛、  
世界文學の一大驚異たる梵文學を知らんとする人は本書を讀め。

文學士 三上節造氏譯 石井柏亭氏畫  
新譯 新アラビヤナイト

上卷、中卷既刊  
下卷 近刊 美本

定價各十五錢  
送料各八錢

高級冒險探偵小説、英文學不朽の名著、

近代英文壇の巨匠スチヴンソンの一大傑作たる本書は蓋しロマンチズムの精華、英文學不  
朽の名著にして興趣限りなき冒險探偵小説也。上卷には「殺俱樂部」及「一夜の宿」中卷には  
「大王金剛石」及「マントロア家の扉」を収む、三色版二葉、玻璃版五葉裝幀華麗きはまりなし。

水野 葉舟 氏 著

一年間の  
手紙の實例 一日一信 (再版)

小形箱入  
美本 定價 壹圓十錢  
送料 八錢

現代的書簡文範。實際的書簡辭典

すべての人が日常必ず使用するべき書簡の題目を集め、高尚にして平易、流麗にして温雅現代に適切なるあらゆる文體を應用せる手紙、ハガキ、電報等の作例約二百通を收む。日常生活に必要なあらゆる要件を網羅したれば一面一貫せる興味ある讀物たると共に、機に應じ所要の作例を檢出し得べき實際的辭典也。

水野 葉舟 氏 著

ハガキの書き方 (再版) 小形箱入 定價 六拾五錢  
送料 六錢

ハガキを巧みに使用するは社交の一大要件也。

□情味の豊かなハガキはどう書くか？ □感動を與へるハガキはどう書くか？ □機智に富むハガキはどう書くか？ □繪ハガキの使用法 □年賀招待等形式的なハガキはどう書くか？ 其他ハガキに關する禮節心得と適切なる作例を網羅す。

三宅 克己 氏 著

寫眞のうつし方 (三版) 小形箱入 定價 七拾五錢  
送料 六錢

簡單に手軽に誰れにもできる寫眞撮影の絶好手引

水彩畫家として名聲噴々たる三宅克己氏が自己の經驗を基とし何人にも了解し得る様最も懇切に最も丁寧に寫眞撮影法を説かれたるものにして寫眞器械の選擇より現像法・印畫法等一切の事項を網羅し洩らす處なし精巧寫眞版十二葉を挿入し一々撮影に關する解説と注意を與へられたり、眞に寫眞界空前の好著也

中澤 弘光 氏、森 脇 忠 氏 著及畫

スケッチの書き方 目下印刷中

水彩、油繪、鉛筆、色鉛筆、ペン畫等スケッチの方き方を最も平易に講述せられたるものにして一々挿畫によりて説明し初學者にても直ちに了解し得べき空前の好著也

書叢文歐スルア

外國文藝の理想的註釋叢書

平田禿木氏解題詳註 (コンラッド作)

I 青

春 (再版)

定價 四拾五錢  
送料 四錢

現代英文壇の巨匠コンラッドの一大名篇

戸川秋骨氏解題詳註 (ギツシング作)

II ヘンリー・ライクロフトの手記

定價 六拾五錢  
送料 六錢

近代英文學中の一大珠玉、行ひすませる近代人の田園生活感想録

平田禿木氏解題詳註

III 近代英詩選

定價 五拾五錢  
送料 四錢

近代英詩中の名作佳篇を收む。卷末に「韻律法」を附す

戸川秋骨氏解題詳註 (エマーソン作)

IV 報

償

論

目下印刷中

エマーソンの代表的のエッセー。英學生必讀の名作

装幀高華空前の小形美本

與謝野品子氏著

新譯徒然草

近刊

北原白秋氏著

歌集雀の卵

近刊

北原白秋氏著

白秋小品

近刊

水野葉舟氏著  
高村光太郎氏畫

小品地上的もの

近刊

和田英作氏、藤島武二氏、長原孝太郎氏、石井柏亭氏、小杉未醒氏、津田青楓氏、  
結城素明氏、橋口二葉氏、山本鼎氏、森田恒友氏、坂本繁二郎氏、織田一磨氏畫

現代名家圖案集 第一輯

近刊

祇園歌集

吉井勇

新潮社版

小夜ちどり

長田幹彦

新潮社版

舞妓姿

長田幹彦

新潮社版

鴨川情話

長田幹彦

新潮社版

舞扇

長田幹彦

春陽堂版

祇園夜話

長田幹彦

千章館版

289  
289

福子  
百の  
鶴

龍  
美

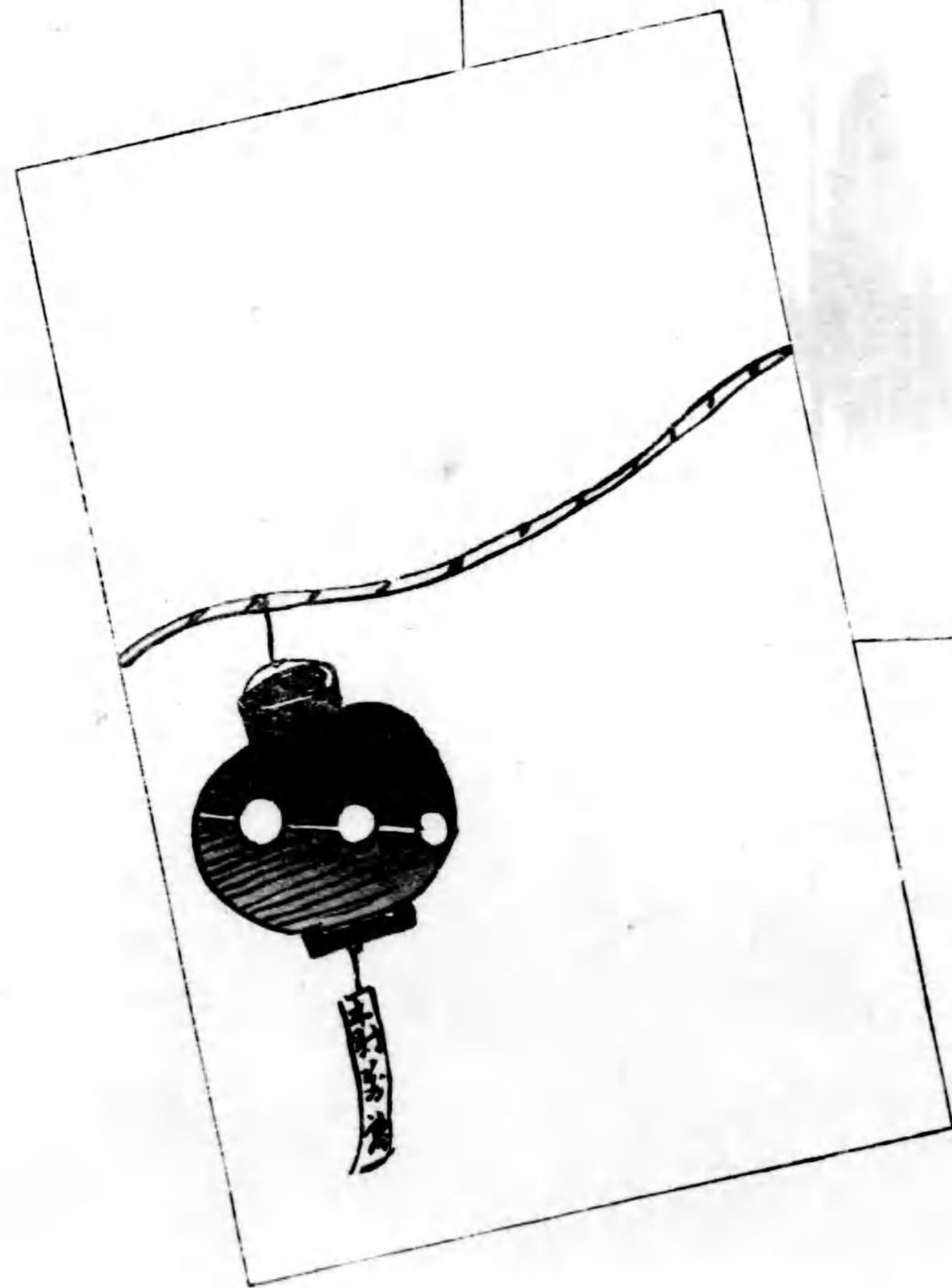
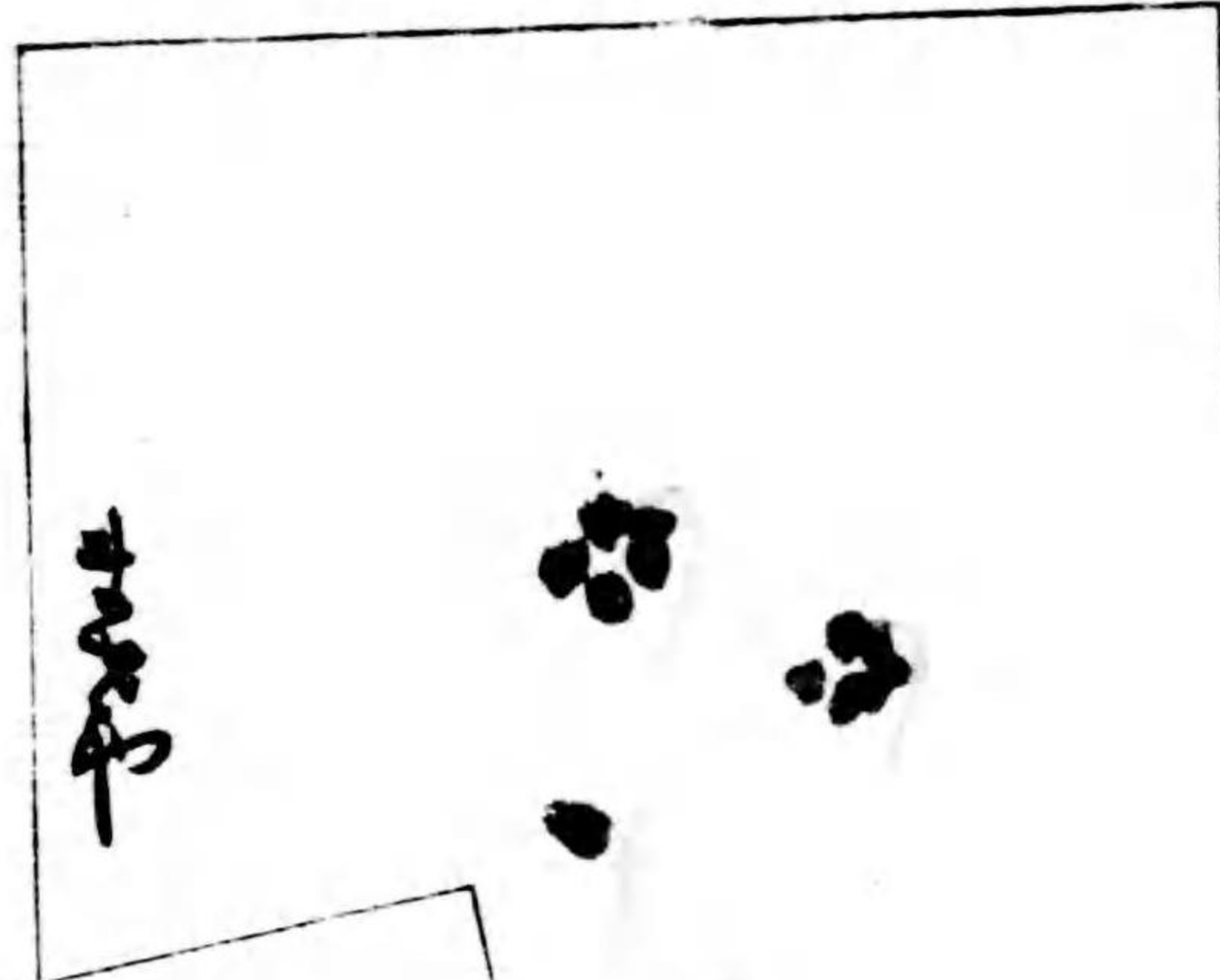
吉井

長

詩  
人

子

長



美龍

終

